主幹◇麻生路郎

川柳雜誌

四月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和四年四月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌
第六卷第四號
川柳雜誌社發行

四月例會

▼日時　四月四日木曜午後七時
▼場所　南區日本橋一丁目交叉點
　北の辻東入　日本橋倶樂部
▼兼題「大金」三句
▼會費　三十錢
　初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします、柳界のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌　第六卷第四號　目次

感想・評論

前後左右(三)　麻生路郎
川柳なればこそ　岩本素人
土の句を選して　橋田山雨樓
淋しい川柳　三輪五輪

研究・其他

我觀川柳(三)　三好草郎
其頃を語る書簡　路郎生
播磨風景　蛭子省二
金熊寺と砂川　竹內多聞
三月の有馬　松盛琴人
月評　水谷鮎美
川柳類題索引(二)　路郎紋太　多聞　ひろし　東洋鬼　ひろし　加香欣女
川柳假の姿(四)　麻生路郎評　柴谷柴舟畵

一路集（募集句）

女優　川村花菱選
土　福田山雨樓選
櫻　中野柳陽　松丘町二　共選
本社三月例會　橋本二柳子記

各地柳壇
八角眼鏡の不思議（表紙）森田ひさし
題字　小出檜重
編輯後記　路郎　ひろし　二柳子

創作

川柳塔　水谷鮎美　住田亂耽
朝田新水　桑原京郎
松盛琴人　高橋かほる
竹內多聞　庄萬よし
中島鐵洲　岩崎柳路
伊藤愚陀　三好草郎
詑間三猿堂　安井ひろし
松丘町二　伊藤紋之助
淺井冷々子　橋本二柳子
○
中澤濁水　安西杏三
奧田雪緒　中見光路
兼重白鷗　友淵貴山

粒々集　森田ひさし　長崎柳秀
相元紋太
近作柳樽　諸家

近作柳樽

路郎選

何處をごう來たか四十の春に逢ひ　別府　晃卓
もうけ口資本の事で一頓挫　同　同
候の候はんのこ文句云ひ　同　同
母の氣はへちまになをるかに思ひ　同　同
お作法こ氣持が合はぬ女學生　大阪　善治
ちこかたい肉へ亭主は値を尋ね　同　同
丸刈は帽子を脱げば湯氣が立ち　同　同
雜煮餅子供へ長う長う伸び　同　同
祈る間もあらぬ事なぞ考へる　豊中　閑生
引越しを大工左官に手傳はれ　同　同
引越してそこら冷き身の廻り　同　同
存在を折り〳〵妻に認めさせ　同　同
遺傳ではないこはつきり父云はず　姫島　二竹
立志傳そんな時代こ逢ふなり　同　同
東山みもちの妻こはかごらず　同　同
死ぬ氣も出るがやはり生きてる事にする　同　守口　武子
あこさしに枕並べて船は搖れ　同　同
生きよ生きよこ青葉の茂みさゝやくか　同　同

行商を信じて妻の無事に居る　金澤　今雨
妾の子本家へ來れば邪魔がられ　同　同
子を抱けばつらゝを取つてくれと云ひ　同　同
サークルの罪か妹ませた口　大阪　露斗
罪の子を育てる母になりました　同　同
天ぴんにねぎの重さをかつぐ冬　同　同
彼女とか云ふのが出來て靴を買ひ　近江　たけし
よく唄ふウエートレスとなつてゐる　同　同
手切金なげつけたいがこの暮し　同　同
かうもなるものかと思ふ世帶摺れ　大阪　時雨郎
上り湯を女の方も汲んでゐる　同　同
大阪を半分歩く朝戻り　同　同
泣くまでの喧嘩を親はぢつと見る　姫島　觀月
九人まで一萬圓でよいと云ふ　同　同
上役は肩をたゝいて用を云ひ　同　同
きつぱりと切れて女將の顏が立ち　大阪　陽喜亭
お隣りで聞けば近所も貸があり　同　同
十三荷あれど愛する人でなく　同　同玄々子
もう直ぐに百圓と言ふ金を貯め　松山　同
酒、酒と云つてるうちに寢てしまひ　同　同
あまりにも聞きわけなさを抱き締める　大阪　テルホ
初戀が坐ればこゝも鹿の糞　同　同
默つてゝ下さいと妾又預け　福岡　不忘

風流子改メ

入學前の子を失ふ　（一句）

新らしい雜囊棺に入れてやり　同
未成品と言ふ逃げ口を持つ畵なり　大阪　好絲
兄ちやんとなつてお前は誰と寢る　同
急いでる足も夕刊知つて居る　尼崎　虛白
集金人炬燵の聲がなまめかし　同　同
本降りを氣にしてやはり勝ち續け　神戸　柳川亭
死顏の事までも出る七回忌　同　同
華やかな裏面を父は說ききかせ　大阪　山茶花
酒飲みと知らずに添ふたわけでなし　同　同
食つてるることを當然だと思ひ　金澤　好次
出勤へうす紫の朝の村　同　同
五萬圓十萬圓と言ひ易し　大阪　天絲
針の穴丈けの眼鏡を買うて來る　同　同
四十過ぎて赤い袖なご痛々し　鶴ノ莊　普天
バスで行きましようと女房世帶じみ　同　同
寢臺へ醫術も盡きて取り圍み　鞍山　草明
正直にかうだと言へば貸しもする　同　同
諦めて居た賞品へ手が震へ　桑港　敏郎
無細工な指にも指輪二つ三つ　同　同
思ひ切り髭を落して小商ひ　大阪　伴內
本妻に納まる腕を凄がられ　同　同
慰めをせめて見出す繪看板　金澤　木偶人
子の中に生き殘らうとする望み　同　同

酒の上の事とは藝者みとめてる　神戸　嶺月
油賣りお手のものとて光らせる　同　同
ブドウ酒へやせた我が身をまかすのみ　大阪　悟空
一錢の釣錢に子守はみんな脱ぎ　同　同
冗談ですみませんぞと念を押し　東京　雨月
一割は女房の理窟損になり　同　同
權力へ理窟を仕方なく棄てし　螢ヶ池　皎月
無慾にする氣が既に慾なりし　同　同
御尤もですが夫も大事ですあきらめて出てゆく母にとゝすがり　大阪　菊路
病人に話す櫻は罪になり　同　同
姉藝者旦那が來ない憂さを醉ひ　松山　芳
初戀の袂の皺をのばすなり　同　同
　　親類の愛兒逝く（一句）　島根　花情
慰めし太鼓たゝけば鳴るものを　同　同
忘れたい氣持で吹いた笛なれど　神戸　重陽子
詫住居何處からとなく風が吹き　同　同
結局は元金だけにして貰ひ　金澤　三波子
色街で小學校の友と逢ひ　同　同
頑是ない時はこゝらで遊んでた　紀洲　光哉
浦島を十年ぶりの我に見る　同　同
春が來るけれど彼女の細い首　尼ヶ崎　吟女
病んでゐる子へ學校の鐘がなり　同　同
月二度の小豆御飯も嬉しいね　螢ヶ池　柳月

ナイトキャップ議論も若し春の宵　同　同
魂をうばはれさうな春が來て　同　湖舟
手紙が來れば金が入つてるかと思ひ　同　同
結局は神籤のまゝに動かされ　神戸　卯生
水仙の壷に水差すにも人手　同　同
奢る氣でごつちも上る久し振り　長野　高峰
力あまつてトンカツ皿を出る　同　同
或る時の心蛇よりあさましく　長崎　草木
垣根から白痴の唄ふ子守唄　同　同
見下した坂下の家誰か死に　丸龜　ゆずらん
敏捷にすれば狡猾とも見られ　同　同
ハンモック晝すぎからの日が當り　松江　紫吻
ピンポンに女生バンドがゆるむなり　同　同
嬉しさは簞笥半分あけて行き　大阪　賀名芽
渡し船いづれも寒い顔でゐる　同　同
電車の乘り降りにも金を忘れず　東京　春夫
景氣よく呑まうぜといふ空ッ風　同　同
盗人に風呂屋のしまふ柿の音　堺　絃調子
涙ぐんでは又背をまげる支那奇術　同　同
地の色に誘はれて出て髪を結ふ　豐中　石竹
今種を蒔いたことだきおろし　同　同
縛られてゐる月給を思ふまい　大阪　蒼梧樓
四十に近く迷信をしりぞけず　同　同
會へばまたお前も他人らしうなり　西灘　亂柳

墓の上にお菓子をのせる親心　同　同
押入に間借りの米のこぼれやう　鳥取　湖山
パンを見りや尾を振る犬と思ひしに　同　同
エプロンの白さ夕餉に急がしく　神戸　とし雄
御佛像なでまはされて地金見に　大阪　新一郎
やすみたい顔女房に見拔かれる　同　丸葉
病上り餘りに白き枕カバー　神戸　幻柳
空瓶になれば素氣なく隅へ蹴り　大阪　柳狂
無作法の小言は客が去んでから　同　柳一
女優かと見れば課長の令夫人　尼ヶ崎　吉朗
子の尿させるに易い春よ來い　大阪　大地
情實が露骨になつて課長首　同　吟水
遺言でないが子供はよく育ち　同　明果
本名を名乘つて女優露路で住み　同　豆秋
あはれとは思へど我に金はなし　堺　清路
戀人よ砂漠の唄をうたをうか　大阪　俊烈
正月といはれてうけるお盃　同　雪松
身の爲だ何んのかんのと踏みつける　福岡　漠々

芙蓉子改メ

停電へ茶腕を持つた儘でゐる　島根　專朗
聲だけで電話修繕して歸り　大阪　一柳
料亭の障子明るく更けて行き　同　美一郎
かあちやんとふり向いて待つ曲り角　鳥取　佳水

貰はれて來たとその子もいつか知り　神戸　柳村
笑ふたと云ふては母もつい笑ひ　大阪　吐句坊
萬歳が客に先手を打たれて居　同　籬楓
治るよと輕く諫めて寂しい氣　同　一舟
飲食店出れば つめたき女かな　島根　不夜城
友人に會つて寢臺もちになり　大阪　樂鳥
鍬振ればこゝにも春を待つ蛙　同　苔香瓏
このまんま死ぬかと思ふ程眠り　島根　樂山人
玉串に喪主しびれたる足を立て　大阪　桂枝
死にたゐて債券の金やり場なし　盤ヶ池　喜良久
溜息をついて藥に手がとゞき　同　波紋
洋服を脱ぐ間もあらず子守する　尼崎　秀聲
食はず共此の子だけはと腕を組み　大阪　さだを
いらくゝと歸れば情夫は呑んでおり　同　田郎
會ふて來たらしい妹の袖に草　須磨　東新丸
寢ておれば淋しく死んだ父の顔　盤ヶ池　しける
おごるとも言はぬ先から酒の事　京都　折草
爭議から戻れば雨がもつており　大阪　江帆
正妻と言ふ顔で待つ薄化粧　同　淡水
死にたいが曾孫見るまで待つと言ふ　泉州　鯉友

悪酔へ仲居自辨の柿を剝き　大阪　喜由
試運轉まはりかけるこ聲を立て　大阪　幸泉
死んだ子にあんなも似合ふウインドウ　同　竹堂
女けのはいらぬ法被酔へばよし　神戸　志郎
子守唄半に道を尋ねられ　大阪　沒食子
天体こして父親を大事にし　朝鮮　花蝶
泣き事を云ひに京から汽車に乘り　西宮　南窓
暗がりに小さな下駄をけちらかし　神戸　市公
期待して呉れこも最早や言へぬ歳　朝鮮　東狂子
眞新らの下駄で鍛入蹴つまづき　尼崎　萬樂
大寒に入つたこ別家尋ねて來　大阪　雪蜂
誰が妻ぞ子供の樣な母であり　堺　平八
たゝかれるまゝになつてる朝戻り　大阪　里十九
嫁にゆく娘氣輕う動いてゐ　平野　やなぎ
待兼ねた雜誌にしては淋しすぎ　大阪　小六
行けば圍碁泊れば酒で責められる　同　勇宗
その嘘へむくゆる術も知らず惚れ　鳥取　穂波子
亭主又幹事になつて金が入り　大阪　ちか子
兄樣こ言はせ面會無事に濟み　同　素萠
待つてゐる友にワイシャツひまがいり　同　忠八

前後左右（三）

麻生路郎

（四）

羅馬の皇帝アウグスタスが、その友人達とある競技をした際に彼は次のやうなことを云つた。『何事にしても六を振り出したものは總てに於て勝者である』と。しかし、私はさうは思はない。少くとも我が川柳に對しては決してさうではない。絶對にさうあつてはならないとさへ思つてゐる。かりにスポーツマンシップでも勝ちさへすればいゝ、どんな陋劣な手段に訴へてでも勝つことが、そのすべてゞあると云へないであらうと思ふ。正々堂々と勝つ、負けても、よく闘ふ。その競技のプロセスを見るに、實に何人も想倒し得ざる程度までの熱と力とを發揮してゐるとすれば負けても一向恥ずる點はなかうと思ふ。まして競技でもなんでもない、川柳に於ておやと云ひたい。

新春の大阪朝日に連載された坂田名人の將棋哲學の中にも勝たう〳〵と思うと、堅くなつてしまつて、負けるが、勝敗を問題外にをいて、瓢箪から出た駒のやうに心をフワリとさせて、打てば天來の妙手が出る。これは坂田自身の考へではない。天から來る妙手であるといふやうなことを述べてゐられたやうに思ふ。我等の川柳にしても、巧い句を作つてやらうのたれそれに負けないやうな句を作つてやらうのといふ時代は未だ〳〵と云はねばならない。坂田氏の云ふフワリとした心で、天來の名句を詠出する心懸が常

になくてはならぬ。自分としての一句を遺し得る精進さへしてゐれば、それ以上のくだらぬことに頭を費す必要は更にあるまいと思ふ。

假裝敵や目標を他の柳友に求めて誰よりも巧い句を作らうの、誰れよりも發表句數を多くしたいのと考へるやうでは、眞にすぐれた川柳家にはなれない。昔からほんとに偉い人は、たつた一人で立派な作品を殘してゐる。むしろ大自然の懷に抱かれて自己の藝術をはぐくんだ人が多い。良寛上人のやうに、自然を友としたり、子どもを對手に邪心なき生活をしてゐてその藝術生活を完成してゐる。

（五）

『近作柳樽』や『光耀抄』や『川柳塔』をひらげて見てゐると、この作家にも個性がかなりよく出てゐて、その作家と親しく膝を交へて語り合つてゐるやうな氣がする。なんと云つても體驗から生れた句には力强さがある。生命がある。ハリがある。讀んでゐてすがく〳〵しいものをうけこることが出來る。頭でこねあげた句を見てゐると、巧い句だ面白い句だと思ひながらも、どつかにその作家の機智が顏を出して來るので、一時はひきつけられても繰返して讀んでゐるとどつかに嫌味が浮き出して來て、もう澤山だといふ氣になつて投げ出してしまう。しかし尊い體驗が生んだ句は光る。裏箔のやうに底で光るから再讀三讀しても飽きが來ない。單に飽きないだけではない。作家と同じ心境にまで私達の心をひきづつてゆく。この意味に於て近來螢ケ池の作家には優れた作品が多い。生に對する强い執着がある。また信仰に生きんとする深いなやみもある。自然に對する讃美もある。新らしき川柳の上に生命的に生きやうとする彼等の努力があり〳〵とそれ等の句を透して流れてゐるのを見ると、自分はいつでも眼瞼の裏の熱くなるのを覺ゑる。信念なきものは亡ぶ。さうだこれ等の柳友が新しい川柳の上にはつきりと生きてゆくことは尤も賢明な人生の消費者だと云はねばなるまい。その他の『近作柳樽』の作家の句を見てゐても、その人その人の環境が實に自由に奔放に描き出されてゐて氣持がいゝ。藝術味の豐な句に接すると、私達の生活は淨化されずにはゐない。自己の生活をよりよくするための句であると同時に、他人の生活をよりよくするための句となるところに、藝術の尊さがあるのである。

『光耀抄』の句に就いては蛭子省二氏が二月號に書いてゐられるから多くは云はないが、ありの儘に生活を句の上に投げ出してゐる點を愉快に思ふ。吟女の母性愛も嬉しい

多喜女の戀愛吟も力強いものをもつてゐる。武子には時に瓢逸な句もあつて素人その人を女史の句に反映せしめてゐるのも面白い。その他葭乃、欣女、壽枝女、よし江の各作家もこりにゞ〳〵個性なり、環境なりをよく出してゐる。鳴尾時代に自然讃美の句を詠んでゐた葭乃が岸の里に移つてからは、殆んど母性愛の句ばかりを詠んでゐるといふことも、その環境の大きな力を思はせられるのである。

『川柳塔』をのぞいて見るとかほるが悠然として異彩を放つてゐる事を誰もが認めない譯にはいかないであらう。

かほるは人間が純大阪式に出來てゐるが、それをそのまゝ輕く投げ出してゐる。それだけ、表現の上にも、句材の上にも大した苦心の痕跡を止めてゐない。極く手近なものを、樂々と拾つて詠んでゐるといふ行き方である。が、それでゐてかほる自身の個性が餘すところなく表出されてゐるところに彼獨自の藝術境があると云はねばならぬ。

毎月かゝさず五座の芝居に入り浸つたり　芝居畫を書いたり、彼自身で設計した芝居がかつた家に、悠々と、のんびりと親子三人つゝましやかに住まひ、大阪の坊ン稚から若日那に進んだ彼が、そつくりそのまゝ跳躍してゐる。從つて彼の句は鄕土的であるから地方の作家には理解されぬ句の多くがあることもいなめない。しかしかほるはごこまでもかほるで押し通すところ、それも意識的でなく極く自然に、押し出して行くところに彼の生命がある。彼でなければ到底思ひつかない句が、根氣よく吐き出されてゆくことに、私達は興味をもつてゐるのである。

二柳子は、訥辯の人がポツリ〳〵と千切つて話してゐるやうな、ごこやらに重たい句である。しかし、彼自身の心境を自由に反映させてゐるそれ等の句には光りがある。三太郎氏のいふ稚拙の句に富んではゐるが　重たい感じのする句ではあるが、あらけづりの句ではあるが、素直に詠んで句に纒めてゆくところは嬉しい作家の一人である。

學者としての柳秀は謹厳そのものであるが人間としての柳秀は遺憾なく彼自身をその句の上に反映せしめてゐる。私は柳秀の句を讀むたびに、あの年配でなほこの若々しさがあるのかと思つて驚かされる。が、島の内に生れ島の内に育つたことなどを思ふと其の華やかな句にも成程こうなづかされる。

こゝでいろんな作家に就ていろんなことを述べてゐては際限がないからこの位にとゞめておくが私が特に云ひたかつたことは、『川柳雜誌』の句が單なる技巧の上に立つてゐないことゝ、各自が歩むべき道を一ト筋に歩みつゝあることのうれしさに外ならない。

月評（前號）

路郎　紋太　多聞
ひろし　東洋鬼

近作柳樽　路郎提出

顧みるたびに子供がまだ小さし

雪緒

路郎……今日の社會に生きてる人々にとつては知々子供を顧みてゐる時間と言ふものは無いと思ふ。併し時々自分に歸る即ち自分の生活を思ふ時には子供の事がふつと頭を掠めて行くものである私も多くの子供を持つて暮し難い今の世の中に生きてる爲に殆んど子供の事等は忘れてゐる事があるが、時々自分の慘めな生活とその次の時代に生きる子供の生活の事を考へると何だか暗い氣持に捉へられる事がある、殊に自分が六十にも七十近くにもなれば末子が二十にならない事を考へるとそれは一つの言ふべからざる憐みである。この句もさういふ氣持を詠んだ句であらうと思ふ。繰り返してこの句をよんでゐると、少しく熱が足りない樣な氣持もあるが相當手腕のある作家である事は「兵隊もよし勇壯な足で行く」「だまされて皆溫室で咲きも咲き」等の句を見る時に充分肯けると思ふ。

紋太……句意はよく判るけれども、そして同じ境地に在る人には同感を喚び易い句ではあるが路郎氏の言はれる通り私も叙法に熟がない樣に思ふ。それは「顧みるたびに」の「たび」が災ひして居ると思ふ。

多聞……この句を見て直感した事は、作者の年齢がその句の上によく表はれてゐて、私には丁樣浮ばない句であると思ふ。前兩氏の御意見に勿論同意しますが、この句境に就いては子供のまだ小さいのを、急に思ひ出したものではなく、何か事がある度に子供の小さいのが氣にかゝるわけであつて、特に「子供がまだ小さし」と言ふ言ひ方は素直に言ひ盡してある樣に思はれる。

ひろし……「顧みるたびに」と言ふのは自分の生活なり人生に就いて、ふりかへり見ると言ふ意味であらうと思ふ。だから幾分そこに間ののびた感じを與へるのも己むを得ない事と思ふ。

紋太……餘りに叙法がその儘すぎると思ふ。思つた事をその儘作らずに自然に生み出すのが本當ではあるが、その場合にその作品が自然に生き〳〵としたものになつて居れば、成功したわけだが、この句の樣に全体に生溫い感じがあつたり、餘りにその儘だと思はせる樣な句に隙がある場合には成功してゐないといふ事になる。この句の内容の持つ味ひに眞に眞面目に深い味ひの生れるものであつて私はこのかうした句想を良いものと考へてゐる。要するに叙法に就て惜しい所があるが、句想としては良いものだと思つてゐる。

路郎……割に淋しさが出て居ない。之は全く句として表現する迄の燃焼が足りないのだ。餘り多くを作者に望む言葉かも知れないが、折角の詩想を多少間ののびた表現をした爲に第三者に強い感激を與へずに終るといふ事は甚だ遺憾である。特に期待してゐる作者の一人であるだけに、やゝ手厳しい言ひ方かも知れないが如上の事を注意しておきたい。

ひろし提出

瀬戸火鉢想ひはめぐり〳〵消え

雅幽

ひろし……何時もローマンチックな句を推

奬するやうだが、火鉢を抱いてゐる作者の頽廢的ななかにもなごやかな氣持がよくうけされると思ふ。同じ作者の「向ふ脛だいて遠い〳〵夢」の句も同じ境地で大變親しみを感じてゐる。

路郎　この句からローマンチックな感じをうけとる事が出來ない。殊になごやかな感じをもうけとる事が出來ない。寧ろ生活苦を詠んだものとしてうけとつて居る。それにしては强さが足りない。それだけ同じ苦しい生活戰に、際立つた惡闘が無く、苦しい闘ひの中にも弛緩した氣持が出てゐる樣に思ふ。ひろし……僕はこの人はローマンチストで或ひは苦しい生活をして ゐるのかも知れないが、その中でも昔の樂しい夢をゑがいてゐるのだらうと思ふ。「想ひはめぐり〳〵消え」の言葉を僕は樂しかつた幼時とか戀とかと言ふ風に解してゐる。

紋太　「想ひ」と言ふのが どういふ想ひであるかゞ一寸判り難い。そこでうけとり方が違つて來るのでせう。けれどもよく灰に戀人の名をかいては消しするとか 或ひは灰に字を書いて 差し向ひで話をしてゐるとかいふ樣な句は今迄何回も見た事はあるが、この句も情景は似た樣でやはり 一人で火鉢の灰をいぢり乍ら何か思つてゐると言ふ 所であらうが今迄のありふれた句と違つて、もつと切實な感じが味はゝれる樣に思ふ。「想ひ」と言ふ事がローマンチックにとれるか 生活苦にとれるかといふ點は私にも多少違つた 感じが起つて來る。私のは、その人の境地が生活に喘いでゐるとか戀に浮れてゐると 言ふのでなしに、一人火鉢に對してゐる時に、何だか淋しい人生の姿を思ひ浮 べてゐるといふ程度にしか私には思へない。兎に角「想ひ」が何であるかは色々にとれる としてもこの句の持つ實感味は非常にいゝものだと思ふ。

多聞……私はこの句を同じ作者の「餅のかび削る二月の男なり」の句の樣なはつきりとした線の太い句と比べて「想ひはめぐり〳〵消え」と言ふ言ひ方が線の弱いものとなり、この句から强い悲しみとか、ローマンチックとかさういふものを摑み出す事が出來いが、そこにこの句の價値があるのではなからうか。

路郎……僕の言つた所と 紋太氏のいはれた事にはさう閊きがないと思ふ。僕は生活苦云々と言つたが それが弛緩してゐるのである場合紋太氏の言はれた樣な境 地に作者がある事を、のべたのである とにかくこの作者の最近の句が、やゝ力を失つてゐるのはその生活苦から來る思想の弛緩に 原因してゐる事を、も一度繰り返しておきたい。

紋太提出

馳けつげて見れば寢床は北を向き

蒼梧樓

紋太……之は親類とか知人とかの死に 際した出來事を句にしたものだと思ひますが、愛情とか言ふ樣なものは出てゐないかも 知れないが、慌てた心持や、その驚きといふ樣なものがよく出てゐると思ひます。さうして實際は悲慘な情景であるに拘らず、この句に嫌な感じがないのを感心します。

ひろし……二三日前に、幼な馴染の友人を失つた私には、どうもこの句の感じに、慊らぬ思ひがします。「馳けつけて見れば」が餘り驚愕をあらはしておらぬ樣に思ふ。「北を向き」と言ふほり出した氣持が、私のその時の悲痛な氣持と餘程異つて居る。之はさうした私のみが感じる事かも知れませぬが……。

路郎……僕はこの句をよむと 事件の報告をしてゐる樣なものにうけとれる。そして肉親の死に直面した感じでは全然ない樣に思ふ。

多聞……私も馳けつければならない 程の人の死に直面したやうなしつくりしたものを受取り難い。それは「寢床は北を向き」と言ふ事をはつきり言ひすぎてゐる。驚いた人が北を向いてゐるか、南を向いてゐるか、直ぐに之を句にして了つ た所に失敗してゐるのぢやないかと思ふ。

紋太……さつきから承つてゐると諸君は そんな場合に直面した人としての 感情が出てゐないと批難される樣でありますが、成程この句には冷淡な程 さうした感情が出てゐない けれども私はこの句をよんで浮ぶ所の情景は急いで馳けつけて見れば 既に事の終つた後である。襖を開けて驚いてゐる姿が浮んで來る。それは事件の報告であるかも知れぬが、その事件から悲哀感が私には味はゝれるので感情の直叙でなくても事件の 再現からさうした隱れた感情をうけとれゝばそれでよいのではないかと思ふ。

ひろし……紋太氏の仰せの樣な事は無論判ると思ふ。併し僕は「寢床は北を向き」と言ふ事が死人は北枕にするといふ慣例的な所から來た樣に思へるっそれだけ感銘が薄いのではないかと思ふ。

紋太……さうかも知れぬが、さういふ慣例が一般的であるのを利用して簡明に情景を彷彿とさせてゐる。

路耶……私は「寢床は北を向き」で死を肯かせる手法卽ち馳けつけると死んでゐた と言ふ事だけに煎じつめる事が出來て、そこに作者自身の特殊の感情が流れてゐないから之を一つの報告的な川柳と見做したので、どうしても肉親の死に着面した人の感じが浮んで來ないのである。多分肉親關係はないのであらう、同じ死にぶつつかつても

泣きながらよい方をとる形見分け（古句）

の樣に人物なり情景なりが巧に表現されてこそ句としての生命があるので、この句の樣に馳けつけて見れば死んでゐたと言ふだけでは驚きや悲しみは強いられた型として受けとらなければないと思ふ。

多聞提出

花鋏花の生命のそれ〴〵や

草木

多聞……非常に生物の纖細な所を觀察して居るので、その人の環境が懷しく感ぜられる。よそら事ではかういふ句は出來ないであらうと思ふ非常に推奬に値いする句と思ふ。

ひろし……草木氏は毎日新聞の健康標語に入賞しておられる人で、昨年長崎で會つた事がある。大變地味な人であつたと覺えてゐる。この句にも氏の性格が出てゐる樣に思ふ。花鋏を持つて花園に降り立ち、花を剪る心持がよく味へる。表現にも新しみがあつて佳句と思ふ。

（この時東洋鬼氏出席）

路耶……作者の持つてゐる句境もいゝし、表現の技巧も優れて居て、申し分のない優れた句だと思ふ。前號にあつた石竹君の「蛙ふくれるな埋めてかへすよ」にしても、花鋏の句にしても、共に川柳の境地を押し擴げて居る事を喜びとしたい。

紋太……まことに調子の良い美しい快感のある句で、之でいゝと言ふておきたいのだけれども少しだけ私の感じを言はして貰ふ。この句は大体鋏を使つて花を剪る時に生れた句であらうと思ふが、私にはその鋏の棘々しい感じが強く、調子の美しい割に或る氣取り方が閃めいてゐる樣に思ふ、之は私の憎まれ口であるかも知れません

路耶……花鋏から棘々しい感じをうける樣な話ですが、僕は花鋏からさげ〴〵しいとか毒々しいとかいふ強い感じをうけとる事ができない。寧ろ明るさと花や莖を剪つた時の音からうける快さとを感じる。そしてその花や莖から滴る露や雫といつたものまでも感じさせられる。

紋太……いや、それは花鋏と言ふ字は美しい感じかも知れぬが、事實は私の知つてる花鋏は普通の纖細な鋏でなくして鷹の爪の樣なその癖、刄の所がいやに光つてゐるものである。成程音はいゝけれども、花鋏と上五に置いた場合に私がさういふ鋏を思ひ浮べた時に、その感じが強くて多少の棘々しさを感じずには居れない、それで言つたわけでその爲にこの句を殊更批難しやうと强辯するわけではない。

ひろし……私は先程紋太氏の言はれた「音はいゝけれども」と言ふその花鋏の快い音を思ひ浮べ而もその花鋏には、花に對する優しい同情が籠つてゐるのである。その事は「花の生命のそれ〴〵や」といふ表現によつてさう感じるのである。

紋太……僕はその花の生命に同情をすると言ふ心持を感じさせられる傾きがあるのを實は批難したかつたのです。

多聞……私はその句の生命は「花の生命のそれ〴〵や」の中に含まれて居て、鋏の恰好とか音とかそんなものは何等感興を喚ぶ事のできない程に表現されてゐると思ふ。先程からそれ等に就いて、論議されてる事を遺憾に思ふ。

路耶……私が花鋏に就いて述べたのは、只花鋏が棘々しい感じがすると言ふ言葉があつたので、それをさうでないと否定したのにすぎなくて、この句の生命が花鋏にあると言つたのではない。ではこの句から花鋏をのけて考へたならば、どうか、句としては甚だ抽象的なものになつしまふ。その點から考へてこの場合花鋏の上五は何等句の生命に價値がないと言ふ言葉は當らないと思ふ、鐘が鳴る

のでもなく、撞木が鳴るのでもなく鐘と撞木の間が鳴ると言ふ樣に花鋏の上ヵと下の「花の生命のそれ〳〵や」とが巧くミキスチュアされて初めてこの句の生命を生むのだといふべきであらう　兎に角美しい句として推奬してゐく

東洋鬼……僕は多聞氏及び　路郎先生の説に共に贊意を表したい。最初この席に來た時から此句が自然を深く知つてゐるといふ事に就いて感心して居るのであるが、丁度今花鋏と言ふ事に就いての議論が出たので、それに就いて私の感想を述べさして戴きたい。この句は多聞氏の説の如く中七及び下が句の生命だと思ふが、併し路郎先生の説の如く「花鋏と言ふ言葉は中、下の作者の主觀がどういふ場合に表はされたかと言ふ事を示す上に必要であつて、その句がある爲に、この句は一つの纒つたものとなつてゐるのだと思ふ。

多聞……聞いてゐると花鋏が要らない樣な風に言つた樣になるが、花鋏の恰好なんかを云爲するのではなく花の生命は矢張り鋏あつてのものだから無論花鋏は必要でないと言ふわけではない。

紋太……僕はこんなに迄長く言いたくはなかつたのですが、兎に角花鋏と言ふ名詞を最初に示された場合に、その形を想ひ浮べるのは當然であらうと思ふ。たとて次を讀み下して初めて花鋏の使はれてゐる場合が、はつきりとして來る。その順序で前に言つた樣に感じたわけで　尙ほ後に反復して考へて見るが今では自説を主張する。

川柳塔　紋太提出

裏長屋まもる稻荷もやせたまふ

光　路

紋太……氣の利いた皮肉だと思ふ。

路郎……同感。

紋太……人生を深く見てゐると思ふ。

ひろし……かなり辛辣な皮肉だ。

多聞……特にこの皮肉は、描字にも無駄がなくてすんなりして居ると思ふ。

ひろし……このお稻荷さんも、このお稻荷さんらしい初午をやつてゐると思ふと、微笑を禁じ得ない。

一同……少し輕すぎるね。

路郎……併し之は川柳として許された一面には違ひないが、詩の第一義的には價値の稀薄である事を知らればならない。

紋太……同感。

東洋鬼……別に異見なし。

ひろし提出

茶碗の丸さたのしみに滿つ

山雨樓

ひろし……本月評の評者として絶えず眞面目な評論をされてゐる氏の作品を、私が評する事は僭越だと思ふが許されたい。

大變圓熟された境地の樣に思ふ、表現の形式も非常に新しく近來快心の作であると思ふ。而し　面俳想に殃のされて居られはしないかと思ふが如何？

路郎……僕はゐないと思ふ。病後の食慾がはつきり出てゐる。尤も之だけでは病後であるかどうか、といふといふ凝問が出るであらうとは思ふが、食慾と茶碗のまるさとが希望に輝くと言ふ事は恐らく病後の場合でなければ是位に、はつきりと、而も强く表現される場合は少い。優れた十四字詩として推奬したい。

多聞……お互いの抑へきれぬ嬉しさは色々な方法で表はして行きたい。作者がいきなり目の前の茶碗に牽きつけられた事は、その身病後であつたからで、その圓熟した表現法と共に直感も學んでゆきたいと思ふ。

東洋鬼……この作者が病氣であつたといふ事を聞いているものだから、この句に共鳴できるが、私としては病氣その他異常な出來事に會つた時には、それの判る樣な言葉を特に入れたい希望を持つて居る、只その時の主觀をその儘に丸出しにされては解り難い場合が往々ある。その意味に於いて、先程の「花鋏」の句も上五の言葉が必要であると思ふのである、だからこの句に於ても病氣だつたと言ふ言葉を入れなくても只此事が異常な出來事に際しての感じである事を知らす爲に「茶碗の丸さたのしみに滿つ此頃」とか何んとかいふ樣な言葉を入れる必要はなかろかと思ふ。かういふ感想を言へば自分でも如何に自分が詩的情操に乏しいと思はれる樣な氣がするが、川柳を作る上に於ては私は前に述べた樣な用意を自然のうちに持つだろう。

路郎……今東洋鬼氏が言はれた事は、確かに一つの良い態度であると思ふが、この句の場合には之で判ると思ふ。尤もかうした句には、東洋鬼氏の説を生かす一つの方法として句に病後とか何んとか前書をすれば、よからうと思ふ。

東洋鬼……え、それで結構です。

（觀戦筆記）

我觀川柳（三）

＝明るい川柳の諸要素＝（二）

三好革郎

嬉しさを覺へること

人間何が嬉しいと云つて、自分の慾望を滿足せしめることが出來た時ほど嬉しいことはあるまい、その慾望が大なれば、大なるほどその嬉しさは大きなものである。又それが豫期してるたことが實現した時よりも、到底駄目と諦めてゐた時に、それが運よく實現した時ほどその嬉しさは大きくなる。

例へて見れば　子供が到底買つて貰へないと諦めて居た自動車の玩具を、伯父さんがお土産に持つて來てくれた時などはどんなに嬉しい知れない、その子供は大きくなつてもその嬉しさが記憶の世界に殘るであらう。

學校へ通ふ樣になり、中學の入學試驗にパッスした時の嬉しさはさうあるものでない、これは競爭が激しい時ほど大きい、それから春知り初める年頃になり。

初戀の思ひ出になる夏密柑　路郎

と云ふ句があるやうに初戀の思ひ出は男女にとつて一生忘れることの出來ないものであるのは、人生中最も感情生活の旺盛な時代であり、且つ感激に滿ちた時代であるからそのフレッシュな感情に些細なことが敏感に映じ熱病患者のやうになるからで

友達とゐるのでちよつと眼で笑ひ　吐情

眼で笑つただけで、もう相手はその眼の中に千萬言を讀むことが出來るのである。そして一日逢はなければ一年も二年も逢はないやうに思ひ、約束の日に待ちほけなどを喰ふともう仇の末のやうにその薄情を怨むものである。されば古句にも

來た顏は文のうらみの十分一

と詠んでゐるくらいである。まア嬉しさの中でも一番華やかであり。又最も明るいのは戀それも初戀時代の嬉しさであらうと思はれる。それから夫婦愛の滿足、子供が生れた嬉しさ、勝負事に勝つた嬉しさ、金持になつた嬉しさ、地位が昇つた嬉しさ

なぜ我々の周圍には大小幾多の嬉しさを感じる事件が日々夜々繰返し起つてゐる。

着物が出來て嬉しがる女、俸給が上つて嬉しがる男、重役に賞られて嬉しがる社員等々その人の人格と趣味嗜好などによつて嬉しがる對照物は違ふが、私は人の犧牲になつて嬉しさを感じる人には敬意を表したいと思つてゐる。自己を捨て切つた沒我の境地に達し切ることが出來た時の嬉しさに喜びを感じるやうになれば本當の人間だと云ふ氣がする。川柳もその境地の嬉しさを句にしたならば良い句が出來ると思ふが　なか〳〵そこまでは行けないと見にて、いくら搜して見ても此の境地を咏つた句を發見出來なかつた。或は私の搜しようが惡いのかも知れない。

左に嬉しさに滿ちた句を少し列べる。

服脫げばもう膝へくる女の子　二柳子
結ひたてを見せたい門の立話し　無心
碁に勝つて賴まれた用忘れてゐ　朝陽
背の君の質問振りを婦人席　鐵洲
妹の退院
賑やかな朝それ〴〵に何か持ち　白帆
本の年いひなくさひざでおし　（古句）
おいぼれは顏へ格子の跡がつき　（同）
足洗ふ湯も水になる旅戻り　（同）

喜こびに滿ちたこと

喜びに滿ちることは嬉しさを覺へることの兄弟といふより一身同體見たいなものであるが『嬉しさ』と『喜び』とは違ふと思ふので別にした。卽ち『嬉しさ』は主觀的に自分の心境を咏つた場合が多く『喜びは』客觀的に見た場合の方が多いと思ふのである。一つのものを表から見た時と裏から見た時の違ひはあると思はれる。

喜びに滿ちる場合は、自分の娘の結婚式に列した場合の親御達の顏とか、女給達に取り卷かれてカクテルを嘗めながらジャズを聞いてゐる人達の喜びに滿ちた姿。仲のよい友達同志が未來の空想を描きながら一杯の珈琲に顏を輝かせながら話しをしてゐる情景などは確かに喜びに滿ちた相で、微笑みを洩らさずには居られない。

晩酌の前善人になりすまし　其象

一本の晩酌に浮世の苦勞をすべて洗ひ流して、夕刊の社會面の記事の話しや、隣近所の品陶めなどしながらチビリ〳〵と呑んでゐる主人公の喜びに滿ちた姿が目の前に浮んでくる。

今かけたねぢで時計の元氣よく　山雨樓

これは一見寫生句のやうに見にるが、作者は恐らく自分の心境を咏んだものだと思ふ。『元氣よく』の下五で如何に喜びに滿ちてゐるかが覗はれるではないか、澄淸さして元氣のよい時計、それは作者自身の姿ではないか主觀の客觀化である。こうした往き方はなか〳〵難しい往き方であるが、此句のやうに成功するとイヤ味がなくてすつきりとして氣持がよい（以下次號）

川柳漫畫

假の姿（四）

柴路郎評
舟畫

先がない先がないとは父の口

春莊

戀を棄てゝ金に走りし父、老ひてなほ宗教に趨り得ざる父、寂寥云はん方なし。

春は徒らにめぐり來て、父の行末をますゝ暗澹たらしむ。地位名望も、巨萬の富も此の心を救ふによしなし。

ああ。

うどん屋に子持は遂に坐らされ

かほる

黒潮の疾く流るゝが如く、彼の女の若き日は逝けり。美しき夢は事毎に破れて、一家の収入百圓を越わず。思はざりき、埃ッぽき丸髷の重たさを……思はざりき、子持となりて饂飩屋に坐するの日を……。

見送りが互に荷物奪ひ合ひ

放馬

プルに頤使さるゝ者のために『是れ丈けは心得置くべし』と云ふ本、有りや無しやは知らざれども先づマントを被せかけざるべからず。靴の塵、拭はざるべからず。特に二號に對しては第一義的敬意を表せざるべからず　見送りに際しては常に同僚に先んじて手荷物を奪ひ取らざるべからざる也。サラリーマンたるや又難いかな。

實際馬の骨なる情婦なり

刀　三

情婦美たるや花に譬ふれば咲き誇れる櫻にも比すべし。然りこ雖その美たるや幾十%は白粉の消費量に比例せる美也。更に幾十%は若さそれ自體の持つ美也。而して殘りの幾十%こそは惚れた弱味が負擔すべき美なるべし。しかも刻々こ迫り來る彼の女の魅力。

其の頃を語る書簡

路郎生

これは日車君に宛てた手紙であるが、出す機會を失つたものか、僕の手許に殘つてゐた。歐文電報の賴信紙の裏に書かれたものだ。未完として あるが、あとを書くひまがなくてそのまゝに なつたらしい。これを讀むとそぞろに、その頃が偲ばれる。二日といふのは 大正四年十月二日のことで「雪」の第三號が出た頃の ことである。當時私は上福島中一丁目に住み、大阪中央電信局で外國電報の檢閲をやつてゐた。この書中にあるこどもといふのは 長女の純子のことで 今年十五でこの四月には高女の二年生だ。早いものだと思ふ。大阪病院も燒けてしまひ、そのあとへ假の 病院が永く建つてゐたが今の川向ひへ 移つてしまつた。僕もその間に五女三男合計八人のこどもが出來たが女二人、男一人を失つた。

その時分には今のやうに 圓タクの便利さがなかつた。自動車はあつたが五圓位とられてなほ祝儀の二三圓も やられねばならなかつたので、全くブルの專用でソレも實用には用ひなれなかつた。隔世の感がある。

啓。はがきも電報もうけこつた。信濃はどんなところか僕も行つて見たいと思ふ。信濃に知つた人と云へば△△△△位なものだけれど、△△に逢つても別段話すこともない。それよりはゆつくりと善光寺參りでもして、都會を出て來たいふ感じにひさびさ逢つて見たいと思ふ。僕の思ふのは、さうした情緒であつて善光寺でなくていゝのかも知れない。兄が汽車の旅に搖られてゐる間も、僕の方ではやはりニューヨークやロンドンやボンベイやペトログラードや世界に散在する大小幾多の都會名によつて支配されて、久しく鈍つてゐた頭が莫迦に焦々する。卅日は幸ひ四時歸りなので、歸つてから第二回目の校正に着手する積りで大急ぎで歸つた。きてる筈の校正刷が、とんと音沙汰がないと妻がいふ。僕は少からず殘念に思つた。すぐ電話で交渉を開始した。いゝかげんなことを云ふ。幾回か時間を延ばされた末夜遲くから校正をする校正を終つたころは一時を過ぎてゐたので翌朝は一寸頭が痛かつた。

朝、ひさ〳〵に子どもを湯に入れてやる。忙がしかつたので自分も暫く湯に這入れなかつた。湯から歸つて早晝の準備をしてゐるひまに、校正を持つて阿波座まで電車の便をかる。

大塚君が今日は休日なので工場を案内

してくれる。心せきながらも親切に説明をしてくれるので一寸聞いてゐた。多少得るところがあつた。印刷業などは慾得の仕事ではないネ。吳々も二日に刷上げる約束をした。それから石濱氏の原稿の專門語に對する注意も特にして置いた。赤枠についても忘れぬやう注意もし又第一頁に注意書もして置いた。時間によゆうのない僕は出來るだけの考へを僅かな時間に述べて急いで歸つて來た。

昨二日朝八時出勤、今日は四時（午後）歸りであるから歸宅後直ちに發送する積りで出た。ところが午後二時ごろに電話がかかつて來た。まさに大多忙中だつたので『大塚さんから電話』といふ女事務員の聲に、誰かしらと思つても思ひ浮かばない。受話機を耳にして、はじめて『雪』の交渉であることを知つた。仰しやつてゐられた歐文の文字は出來ませぬとのこと、これから活字の注文をせねばならぬから、明日まで『雪』の印刷をのばしてくれぬかとのことであつたが、もう延ばす日は一日もないと自分は思つた延ばすといふことは頭腦に非常に惡い影響を來たすばかりでなく、延ばしたその翌日は僕が朝八時出勤、十時歸りといふ大厄日に當る故、事實上更に發送を順延せねばならぬことになるので、何んとかいゝ方法もないかと問ふ。それでは少し離れるが歐文の文字の上部の線を別に入れませうかとのこと、それで氣持よく行くかどうかと僕が突嗟の間に聞く。彼、一寸待つて下さいといふ。代つて例の二階にゐる校正の眼鏡君が出る。それはどうも駄目ですといふ。それでは筆者には實に氣の毒であるけれども、文字に間違ひのないやうに特に注意して印刷して吳れ給へ。でなければ二日印刷のつもりで待つてゐる連中もあること故と電話を切ることにした。

それでは四時歸りだから、それから行くと云つたら、それには及びません、五時には刷り上げて持つて行くとのことだつた。この日大雨、雨を衝いて歸る。雜誌、未だ來り居らず。來次第發送の出來るやう準備をなす　夕食後　電話にてせく。いゝ加減なことをいふ。大塚さんは居ませんといふ。電話にて强行に談ず。今出たから、三十分ほどすればお宅へつきますといふ。やれ〳〵と思つて歸る。

帶封や硯を出して、机の上に發送簿をひろげて待つ。山口君（御承知の）來る。發送を手傳はんとて筆までを持參す。時間ある故、ロングマンを講ず。なほ『雪』はつかず。このところ少々焦れ氣味なり。豫定が外れては、留守中の貴兄なり齊藤君なり、會へ持金する筈の游魚若にもすまずとて大いに待つ。十一時になる山口君待ちくたびれて殘り惜しさうに歸りゆく。妻、蒲團の上に横はる。子どもは机の横に轉びてすや〳〵と眠りゐる。僕は十一時十五分の時計を見てワイシャツを脱ぎ、妻に着物を出せといふ。あと

を締めさせて、一寸寒い夜氣を吸ふて出た。セルはもう寒い。雨があがつて水たまりはきらきらと光つてゐた。

櫻橋で電車を乘換へて阿波座中通に降りた。もう大分に遲い。ドアを押して這入る。宿直員がゐる。大塚君がゐる。小僧が椅子の上に倒れて眠つてゐる。今晩ごの位遲くなつても持つて行くつもりで小僧を起してゐますのですと大塚君、大いにあやまつてかかる。早速に工場に案内をしてくれる。機械は運轉の眞ッ最中である。印刷人が肉によごれた顏のなかから異樣な眼を光らせてこちらを見た。近づいて刷上げてゐる赤枠を見る。赤枠を忘れてゐたのでもう出來てゐるから持參しますと電話をかけたんですと大塚君がいふ。それに木版の赤線が巧く嵌らないために削るやら大いに騷いださうである。靜に機械の動いてゐるのを見て、薄ぐらい工場の中に立つ。工場の一種獨特の匂ひが鼻をつく。

僕は僅の印刷物をかく遲くまで、如何に營業とは云へ、立働いてくれる印刷人等やその外の人々に感謝せずにはゐられなかつた。出來のいゝ惡いは別として刷上つたのは午前二時をすぎてゐた。

大塚君が手傳つてくれて共に二ッ折にする。一括として拘わて出た自分は暫く電車を待つたけれどもなか〳〵來ない。醉ひごれ二人が新町の方から戻つて來る自分もぼつ〳〵北へ北へと歩いて行つた信濃橋交叉點を過ぎて伸に乘る。京町堀へ行くか行かぬに電車に追ひ越される。車屋撫然として横に曲る。

筑前橋に來る。橋の上は、しつとりと雨に濡れてゐる。橋から見る水は黑く、立ち並ぶ河岸緣の家の灯がきらきらと水に搖れる。淋しい晩だなアと思ふ。逢ひに行つて逢へずにかへる男のやるせない心もちになる。何ンの物音もせぬその夜のありさまを伸上にしみ〴〵と味つた。昔、僕等のこごもの頃には、よく幻燈が流行したものだが、この夜の光景は全く自分を昔の幻影にまで引きもどした。

大阪病院の横では、ゆくりなくも我が亡き姉を追想せしめた。病院からは、おきまりの氷を碎く響があたりの寂莫を破つてゐる。田蓑橋近くのこころでは病院のモーターが凄まじい音を立てて一層淋しさを增した。又橋の上に來た。闌干にぴつたりとよつた黑い影。もしや身投げではあるまいかと、ぎよッとする。伸上からそッと透して見た。

こんな晩に、こんな時間に夜釣とは彼も道樂の人なるかな。伸上の我れも御多分に洩れぬ道樂者、伸夫の冷たさうな、草鞋の音がぴちやと〳〵自分の感覺をしげきした。（未完）

もう十時だ。これから歸へる。今日『雪の發送をした。速達は行かない。いゝ方法もないので普通で出す。

日車兄　路郎

四段雜記

播磨風景

蛭子生

安井寛さんは姫路の産、お國名物一ツ山大祭の屋根から屋根へ大造り物、それは六十一年目にあるとかの、繪葉書を下さつたのは昨年の晩春私の中學時親友に姫路人があつた、今は消息もわからぬ一度は足を入れ地方事情も知て置き度いと思つてゐた矢先に、歸郷された安井さんから、沿革名勝誌一明治三十九年版二十ゝ錢一と云ふ小冊子の借覽を許された、播磨風土記を主なる參考としたものらしいが、讀み放しも惜いから古川柳に交渉しつつ、他ともツギ合せ、此稿を綴る。

◇

播磨の名の起りは、大日本史にも出て居る、傳説與味として「新猿樂記に諸國の名産を擧たる中にも、播磨の針とみえたれば、播磨は針によれる名なるべしと云へり、上代より針を出せしにやは知るべからず」で針間の文字も用ひられて居る。人國記に因るも、南に江海をうけ山を負ひて上々の風土、暑寒は溫和、萬事富有である。爲めに安樂に死す、古昔の武士にも赤松黨が如き、利心より出て所謂不及是非と云ふ者なるべし、など餘りよくは論じてゐないのは、エヨウが過ぎるとの説であろう。

◇

案子のよく書寫山と言馴れて書寫山圓教寺は、性空上人に依つて開え、徒然草にも記され、上東門院和泉式部の登山あり、二ツなく三ツなき法をきくからに今は五ツの障りあらましと、歡喜の餘り詠じ給ふた。

書寫山の杉は遠目の筆と見え一本杉は峯の西手に在り、船人の目標であつたのが、登山者の迷信で、皮をはぎ持返るため明治二十三年頃枯死し伐殺される。

播州名所一筆は書寫の山著聞集の記に、法皇書寫山に行幸ましまし、對面中に密に畫工をして、上人の像を描かしめられた處、山動き地震ひ、法皇恐怖し給ふ。性空曰く、恠むこと勿れ、我像を寫さしむる故然るのみ、顔に小さきホクロ有り、畫工知らずして未だ圖せずと、震動に驚いて筆落ち墨飛ぶところ宛然悲形に異ならず、皆人之れを信じて今に寶藏さるると、

◇

姫路城主柳原式部の十代高尾根引一件は昔の川柳句會の席題位にはなつたであろう。よりどりの句があつて名の高い姫は高尾をよせつけず

天主閣には、小坂部姫なる妖怪變化がゐて、高尾は所替の越後高田落さとなつた。

◇

石の寶殿は文峰の書、觀瀑處の三大字と俱に、珍とするところ、

石の寶殿平内の下屋敷

「戸をとにし屋を西にし、倒れて石を穿てる大窟中に横ふ、盡し山岩其のまゝを鑿りて石殿を作らむ考案なりしに功竣りて正立する能はざりしならむか」相生手枕の松は名あり、

高砂は今も序に行くところよき序なれば……一見せばやと存候〈諺古鐘もある、松屋筆記に本朝の洪鐘は三井寺高砂鎌倉圓覺寺など聞ゆ

◇

名物の數々は、貞世の歌「もとよりも頭はりまの國なれば、飾磨のかちん喰はしてもみよ」の孫二餅、搗染、糯蓼、杉原、鹽、鏡、野里で鑄る播ま鍋は廣島燒、鑵と對比せられ、京知恩院の鐘も、野里の芥田五郎右衛門が鑄造にかゝり、靴革は古來朝鮮の牛皮を市川に晒したもの、宗之の名譽をつぐ珍火箸は、珍の珍、玉椿は甘黨の評判、阿菊煎餅は當然あるべきもの、十二所神社境内に阿菊の祠あり、皿を納めて願事を祈る、姫路皿屋敷談は長談義となる恐れがある番町と播州の誤傳などは詮議せぬ方がよからう、

番町の古井戸でよぶ燒繼屋一枚を破り一命を井へすて阿菊の祠から年忌毎に、亡魂の阿菊虫が井戸から出るそうだ「五軒屋敷小幡九郎右衛門の邸に阿菊の墓あり、其の石佛はよく諸願を叶ふ、其家には古來菊を作るを禁ず、六臣譯筆に見ゆ」

◇

土俗民俗研究としては、名越祭影向祭、修羅踊、そして陰陽石も、かなりあるらしい。揖保の田神岩、瀧尾神社のヽカエノミコト、大次神社の御神体は安產守護の信仰のマト、

「清十郎ころさばおなつもころせ、生ておもひをさしやうより、も一好色五人女にうたはれ、宝津はにぎはへる大湊、家榮へ萬づに不足ない商人の子、清十郎と姫路女お夏の出來事は寧ろ誇りであるかもしれぬ。

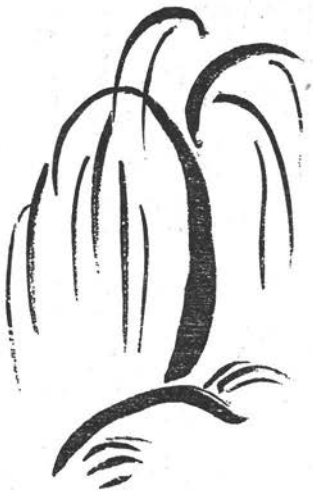
◇

御別家の不慮藥かんまで煮えかえり

いたちを對にふらせるは脇になし

貂二匹輪ちがひに尾を振つてみせ

脇坂家の紋所一二月二十一日記



川柳塔

○　水谷　鮎美

自制するからだの骨がぼきゝ鳴る
母ゝなりても矢絣を着る
朝の呼吸ぶろれたりやの腕時計
四五日の風邪にマスクをかけて逢ひ
鳳仙花やぶれば辻占出そうなり
出戻つてつげの櫛なぞよく似合ひ
郊外で天下晴れての濯ぎもの
黒眼鏡朝の氣持のものでなし
母の眼にさびし片輪の子がのこり

○　住田　亂耽

かほるさんへ（二句）

物干の人が繪になる日向に居
立雛の圖に繪具皿みなよごれ
童貞を否定されつゝ隅で呑み
雀班の奥樣すましてゐらつしやる

映畫「モン・パリー」を見て（二句）

松竹で見るゝ巴里は裸女ばかり
玉はころぶものよ陽氣なゲーム取
子を抱いてかし家の音請眺めてる

○　朝田新水

紙出して藝者かんざし拭いてゐる
肱を持たすに紫檀の机
來いといふ家に餘財の積まれたる
許されず門に立つてる男の子
不景氣は娘を賣つた八百屋が來
定紋の同んなじなのもなつかしく
鬼瓦繁き木立の隙間より
掃除せぬこと貧しさの一つなり
冬の足こうまで白いことは知らず
住宅地村とは違ふ言葉なり

○　桑原京郎

卒業に食にる食にぬは思ふてず
泥濘をハイヤで拔いて憎がらせ
朋輩と呑めば惚氣へ註を入れ
單調を破る死といふことがある
醉ふて出て來て好くの惚れてるの
笑はせて功德したよな顏でゐる
貧しけれどまだドン底でない疊
春近し口繪を壁に張りまぜる
友僊にくるまる跪いく戀
ごこまでの吾が生命やら雲早し

病人と思てか母の聲低し

○　松盛琴人

三五人大阪の灯に戻つて來
錦魚よ錦魚よ氷がとけて來る

永病の知人を思ふ（一句）

斷食でもしたら病氣がよくなろか
白髮や染めん宗右衛門町の春
稻荷の驛へ燒鳥を匂はせる
文明に虐げられた頰の骨
地下室の天井へ固い下駄が鳴り
また元のやうに夫婦となつてゐる
まつくらな天井の下の馬太傳

○　高橋かほる

子守ふご日暮れ忙はしう値が出合ひ
今晩も行くとこがある二日醉
人が好いのかまだ呑み足らず
子を連れて來て素ばやしの陰氣くさ
旦那取り仲仕の二階借つてゐる
青年團ほべたを赤うして歸り
卒業に母の出勝ちの續く事
書店の寒氣がさすと終ひかけ

○　竹内多聞

二女出産（如月十二日）

殖ゑた喜びの中に竈はよく燃ゑる
人の子の欠伸なぞして笑はせる

○　庄萬よし

社會民衆黨南區支部を興す

眞劍になる程女房笑ひこけ

○　中島鐵州

人形視されたを夫人意識する
入院の子へ合ひ藥聞かされる
駈落ちのまだ髪を結ふひまもなし
捨られた草鞋に殘る人間味

○　岩崎柳路

人前で靴等を拭き氣取つて居
物言はずですと愚妻を紹介し
おくられておくり返して後淋し
いやぢやありませんかと女白々し

澤正の死を悼む（三句）

其の一黨に慰められて居る喜世子
髪切つてそれから喜世子ごうする氣
澤正の句を見て淳子泣きはらし

○　伊藤愚陀

入學準備（一句）

圓と圓Aと Bとが狂ひ出し
香水と春の光に家を出る
クリームの淡さも冬の朝の戀
鼓動も高く春なるか春なるか
惚れてゐただけはかすかに知つてゐる

○　三好革郎

階級の前に諦めろあきらめろう
家賃ほど金をとられてジャズと酒
見つむればぐす黑い血の駈けめぐる
女房は鷄が鳴こうが燈が消ゑよが
目が覺めてみれば簀卷にされてゐる
澤庵のしつぽの外に何がある
氣まぐれは天氣ばかりでないと知り
ペンよお前の辛抱强さにおどろく

○　詑間三猿堂

考へて見ますと養子ちとしよげ
姙娠と思へば擧げた手も下し
偉らさうにしても女だダマッチヨレ

○　安井ひろし

萬よし老社民黨支部創立に狂奔

寢言へも眞面目に答ふあほらしさ

山宣刺さる（二句）

七首も主義には力なかりけり

遺骨嚴前ゞ檢束の前

三月四日肺患の友逝く（四句）

ガーゼに埋まり白臘の顔

お臘燭をたやすまじ棺に侍す

酒豪なりし友

ひゞ口の酒に未練を殘し死に

梅月の天ぷらは見ただけの事

○　松丘町二

屈託もなくのん〳〵ゞ水流れ

てのひらへ日を溜めてみる冬

赤い屋根無慘や襁褓ひるがへり

絶望を押しかくしてる假面です

無理矢理に惠みの紙幣を握らされ

お人柄なぞゞ巧みにあざけられ

何だこれしきにかゞやかしい眼の玉を失ひ

○　伊藤綠之助

わらふな金だよ云ふな金だよ

ひゞり身にさびし綿入れの皺

溜息に鉛筆ころ〳〵ころげぬ

村議戰近し（二句）

その上をきけば默りぬ立候補

いち早く名乘りを上げてわらはれる

三朝節ミシンの音に合ひかねて

買物に近道をする麥畑

○　淺井冷々子

親の氣は大學を出りや大丈夫

後悔をして救はれたい〻氣持

○　橋本二柳子

ま〻母を恨むも女車掌なり

冬のポケットに何もなく子は迎に

卸屋の前を屑屋が通るなり

◇　中澤濁水

安いのも寄越すゞ米屋値切らせず

飛行機を見る松葉杖機械じみ

値をしつ〻友ステッキを横取りし

滿開に近く公衆電話出來

寢過して雨戸を繰れば犬の糞

水上署散歩ゞいつた漕がせ振り

警官は拔いてはならぬ劍を吊り

◇　安西杏三

重役はお華客様とよく笑ひ
神の名によつて搾取を續けてゐる
病人の知らぬ羽織で女房來る

友の病ひ篤し

待て友よ我も辿らん道なるを

◇　奥田雪緒

我が城を護るが如く飛ぶ烏
燒香へ人を人を憚る順で行き
食ふものは食つて給仕の謄寫版
無事だらうあれから便り吳れませず

◇　中見光路

月給を望まぬ丁稚暇をこり
人形は可愛がられて鼻がすれ
請願の制帽脱げば髪長し
見てる間に振子の玩具疲びれる

◇　兼重白鷗

姿見て素顔で寄れば眉薄し
待ぼけの怪まれたが腹が立ち

◇　友淵貴山

健やかな子へ一列に夫婦行く
空想の合間〳〵に寒い風
月見てる人に子供がないのなり
ごまかした金は一區の四錢なり

粒々集

東京　森田ひさし

長靴を買へば天氣の續く事
何でもないと姉は手紙をしまひ込み

御影　長崎柳秀

二銚子女房そろ〳〵無口なり
寒念佛嫁をいたはる顔が寄り
その當座兄と姉とのふざけ過ぎ
さて賣るとなれば雜誌は見直され
二日醉ひこうでは無いと踏みならし
ごうせ婆々ですと涙ぐむ袖だゝみ
教場の窓に迎ひの傘が見へ

神戸　椙元紋太

犬の死が朝の子供をおごろかせ
仕舞風呂ひとりに黑い波がうち
雜巾を縫ひ々々下女で年をこり
道普請或日非常な雪景色
子が泣いていつそ世帶にして吳れる
機關車が茶の沸く音でやすんで居
うつとしい空に氣のつくごみ捨場

金熊寺と砂川（吟行）

竹内多聞
松盛琴人

（參會者）萬よし、ひろし、亂耽、二南、三笑、一杉、琴人、加香、松風、多聞、二柳子、萬兩、瓢山、黒天子、朝陽、貴山、靜石（以上十七君）

◇着膨れてゐるので振りまわしの憐劫な梅見ではあるが、今日のお天氣は勿體ないやうな好い日和である。驛々で同勢も加はりヤアヤアと掛聲が滿員の頭の上を交はされる。いつも乍らスッカラカンと明るい朝陽、時折洒落を浴びせる琴人、齒ばかり出してニコつくひろし、おつき合ひのやうな二柳子、夫れに若手の堺支部の人々を交ゼてはしやぐこと。ウッカリ乘り過してはならじと見れば梅の驛樽井だ。下りろ〳〵（多）

〈梅日和の暖かさは水や空なる大阪灣を霞ませて、帽子へは薄い汗をさへ滲ませる、うね〳〵と續く街道は長い。遙かに行く梅見の人は點々として豆人の如く、道の兩側の野や畑地に雲雀がチイチク〳〵と囀る。此邊で生れた叙景句

空高ふ雲雀が鳴いて道遠し

なごであつた、私が二柳子に好い天氣ですネと言へば、午後から風が出ますよとまるで風の神の親分みたやうな事を云ふ、果たして後で風雪に出逢つた。亂耽二南に兼題の句は是非共ウメエ句を作ると洒落ると二南すかさずそれは南海な句だらうと報酬する。ひろし君は不朽變惚氣を蒸發させる。衛生によくないと私は退却する。入れ代つて黒天子、瓢山君が大いにアテられて居る。

兎角する内滑瀬橋に着く滑瀬の溪流、水は激して岩石を嚙みと言ふ好い形容詞も今は用をなさず、今年は降雨少く水は涸渴して奇岩怪しく蒼潭より抜け出してゐる。朝陽君案内して云ふ

茲がソレ先年記念寫眞を撮つた所だ。彼の岩に路郎先生が居て斯ふ皆並んでと説明頗る詳細。一行は少し渴を覺へた頃朝陽氏は夏蜜柑を『ボロクソ』に云つて買ふ。買ひ取つた後で之れは中々好い内紫だらふ……皆分配して味はふ。甚だ美味。何故こんないゝのを皺皮だの乾から干しのと云つたんだ十錢は安いと云ふと朝陽君はぬからぬ顔して擧めて買ふて見ろ、十錢が忽ち二十錢になるワイと虎石將棋の名人！先手を打つて蜜柑屋を負かす。程なく口の千本に達す。根來街道に通ずる山村は梟村梅樹を栽培、柑橘、夏蜜柑、梅花に相映ずと云ふ處だが惜しい哉梅早くしてたゞ黄金色の柑橘のみ時を得顔に陽に映じてゐた。（琴）

◇もう口の千本だ。梅の木はある。ところが花をつけてゐるのは殆んど稀なので一本でもあると頓狂な聲で指さゝれるのも梅見らしい。後から追越す自動車の砂塵にいさゝか色をなして文句だらだら辨當包みは坊主持なごしてお寺のところまで漸く來た。

◇何處に行つても行きつくところにお寺か祠がないと行つた氣持がせぬ何のことはない則を出て手を洗はぬやふな心持だと。此處にも落付かせる寺あり拜みに行けば本堂の奥から聲あり『まあお上り』と、いはれ琴人目を丸くしてその意外さに愕く（多）

◇多聞君は一人釣鐘を鳴らして腕力を示しひろし君は早や石に腰を下して日頃の不健脚ぶりを見せてる。此時禹よし三笑加香の三君自働車で馳せ參じる。一行は直ちに寺後の山徑を辿りて中の千本一望臺に至る。眼界豁然と開けて梅溪を俯瞰する處身は馥郁たる香雲の裡に包まると云ふ可き處だが茲も梅は未だ深い眠りの内に目醒んともして居ない。嗚呼十日遲かつたらとそこらで嘯く。やがて芝原の眺望よき處

に一行は陣取る。本日の主催者の一人とあつて堺支部の貴山君あの貴公子然たる優雅なスタイルで藥鑵を下げたり辨當を分配したり。酒盛が始まると万よし君の三兒論に甲論乙駁ひろし君の自轉車と嫁との價値比較話し醉三笑君の無妻論・なご談論風發默つてゐる者は壽司と妥協し、酒盃と接吻してゐる、是より一行は梅林を背景として記念の撮影を濟ませ奥の千本へと向ふ先頭は近道と稱して道なき崖を辷り下ろさせ之が鵜越へなりと一行を閉口さすたり、丸木橋を渡らせたり、ひろし君危なかしい足取りで渡らふとしたが遂に兜を脱いで後戻りする。一番けんのんだと思つた万よし氏は醉眼朦朧として何に此位のものがと許りで忽ち四ツン這ひになり、丸太を抱へて見事に渡る。流石に老練時と場合によつてあの調子、奇怪縱横と感嘆せしめる。奥の千本を見ざれば梅溪を說くに足らずと聞く。梅林は老幹參差衣帽の觸れる處悉く之れ梅樹、此所へ來たのは午後一時頃でもあらふか俄然二柳子君の天氣豫報は適中して風となり雪となり然も横なぐりの吹雪は用捨なく一行を忽ち包んで終つた

金照寺芝居の樣な雪が降り

多聞君は肖ぐ之を斯く川柳化した。いざ砂川と梅林に名殘を惜むに當つて萬よし、朝陽兩氏の音頭取りにて、川柳雜誌社及堺濱寺兩支部の萬歲を三唱し爲に山狹幽谷の靜寂を破り皆砂川へ砂川へ（琴）

◇砂川、砂川、聞くさへあたゝかそふだ、そつちへ廻らうと村を分れる頃から狂じみた天候も嘘のやうにカラリと晴れてみんなの顏もくつろいだ。谷を出た一行に海はこても藍く左手の彼方に赭土の山裾を砂川にこつて迎れば、こころごころの梅の木雪のかゝるよと見ればそぢやない咲いてゐるんだ、咲いてゐるんだ。紅梅もある。孟宗藪や蜜柑畑のあたりまで匂ふて來る、みんなを喜ばすこと喜ばすこと。

◇大きな壁ではしやぎ乍ら行くに例の万よし、干からびたステッキをある丈け貰込んで貰うてくれんかと二十本許り抱きあるくのも稚氣滿々、山裾の小溝つたひに小松原を扳けるとモー砂川だ。泉州耶馬溪の稱ある此處なこころ、ゲツソリとそゝり立つ砂丘に營養不良の松がこまつてゐる樣は頗る雄大なパノラマを見るがやふにも、此れまた出來そこないの箱庭みたいにも見ゐるこころが奇勝かな。

屏風の尖端に來たころから又寒い風が海からまこもに捲し立てゝ來る。風流の寒いことをよくよくたしかめさせられ一ト先ず作句の讀み上げをせうにも何がさて句箋は飛ぶお茶は傘瓶ぐち冷めてしまふ。裾から吹上げる風に涙さへ落ちて來るので一人二人と斥候のやふに茶店のある凹地にかけつける。店の雨戸を風よけに焚火しながら披稿をすました。（多）

川柳なればこそ

岩本素人

北陸線小松の驛で下車するとそれは大變な大吹雪だ。まともに眼を開けて居られない。眼指す先は猫橋の支部本田柳一路氏のお宅だ。猫橋がどこやら顯町がどこやら始めての小松町心細い限りである。そこへもつて來て前以て案内をしてある譯ではなし、果して宅に居て下さるやら又宅に居て下さつても何んな御用がないとも限らない。雪は中々止みそうにもなし、一そ元へ引返さうかとも思つたが折角茲まで來たのだ、勇を皷して、づぶぬれのからだをマコトヤ（本田氏の店）へ持ちこんだ。在否を問ふと御在宅・ヤレ〳〵有り難や。刺を通じると、今按摩をしてゐるから暫く待てとの事、よろしい暫く處かこうなれば半日でも一日でも待ちますと腹の中、愛想のよい奥さんと世間話しをしてゐると、キツイ近眼鏡の柳一路さん『ヤーお待たせしました昨日は弟の人營ですつかり疲れまして今按摩を取らして居ました、失禮しました』と言つたところから挨拶もそこ〳〵『大阪から素人さんが見へました。今晩白山亭で句會をしますから』と言ふ柳友諸君へ電話をして居られる。暫くすると美ごり葉さんがにこ〳〵として來られる。柳一路さんに紹介される。そこへ又太魚さんがほつちん〳〵した顔でやつて來られる

もうまるで昔馴染の樣だ。美ごり葉さんが『一寸そこまで參りませう』と言はれる、默つて付いて行くと、とある料亭へ案内された。全く恐縮の外なしである。その内時間が來たと言ふので、白山亭とやらへ案内される柳一路、美ごり葉、松雪堂、柳々子、柳三、太魚、井々樓の諸君が寒いのにお集まりくださる。（三月號各地柳壇參照）こゝでまた思ひがけなくも大變な御馳走に出くわす。益々恐縮する。だが實を言ふと、此頃には既にもうお客さんだとか御馳走になるだとか思ふ觀念は全くなくなつて、主客は完全に解け合つて居た。お酒が少し廻り出した頃いつの間にやら一人の美しいのが現はれてゐる。これは／＼と又恐縮、この美しいのは川柳藝者として有名な若葉姐さん芳齡正に二十と有二、委しい事は二柳子君にお聞きください。彌々面白くなつて來る。遠い北陸へ來て居ると言ふ意識はとつくにけし飛んで仕舞つてゐる。

この方々は柳一路氏始め皆さん私とは初對面である全くの初對面でお名前を承はるさへ初めの方々もある。それがこんなにも打ち解けて歡待してくださるとは夢か。

●●●●●●●

川柳なればこそだ。

この前別府でも松山でも、それ／＼に歡待して頂いた。何れも初對面だのに兄弟の樣に打解けてのもてなし、全く兄弟だ川柳兄弟だ。今度松山へ來る樣になつてか　冷々子、五健、水樹、その他の方々が大變可愛がつてくださる。玄々子、壷雪さんなどは夜分宿へ遊びに來てくださる。僕も同業者はまだ訪問しないが水樹さんへは二度許りお邪魔に上つた。さして用事はある譯でないが、會つて、氣持が好い心が置けない。川柳なればこそである。

僕も之れまで他の要件に度々旅行した事も少くないが。川柳家としての旅ほど氣持ちの好い旅をした事がない。僕には未

冬の御用品
あれしらず

御代乃花

本舗　伊藤大一堂
發賣　高橋盛大堂

到る所の藥店化粧品店に販賣す

經驗ではあるが。短歌や俳句では私の樣な無名作家を果してこんなにまで過して呉れるであらうか。をそらくNOであらう。川柳のありがたさよ。川柳なればこそである。これは川柳雜誌と言ふ偉大な後楯のある事もさる事ながら、川柳は他の詩とちがつて、甚だ人間味の豐な詩である爲に、お互の心と心が此川柳の持つ人間味の爲に結び付けられるであらう。可笑ければ大聲で笑ひ、悲しければ誰はゞからず泣く、腹が立てば怒る。戀にしろ貧にしろ腹の底から打ちまけるのが我川柳家なんである。人と人とは相見なくとも川柳を通じて、充分に深い親しみを感じる事が出來るのが川柳家のありがたさであらう、普通會話では徹底しない情味が川柳なればこそ、詩なればこそお互の胸に相通じ合ふのである。

涙なら互の胸に通じ合ひ　欣女

この句の『涙』を『川柳』に置き變へたら、そのまゝで私の言ひたい事が言へてゐる。此の意味でこの句に親しみを持つ『川柳なら互の胸に通じ合ひ』川柳なればこそである。

私もこれから先何れ丈け松山に暮す事やら自分にも見當が付かないが、幸松山に五十人に餘る川柳家等兄弟が、柳友が在る事を心強く思ふ。

川柳なればこそである。

—昭四、三、一三、松山にて—

二月の有馬

水谷鮎美

このたびは時計ももたず拘束のない、いとものんきな旅に出る

十七日　ひさしぶりに糸屋町の舟々、毒仙兩氏を訪ふ。そこをお暇してから鳴尾の鳴玉居を訪ひ一泊。

降り出した雨の音を聞きながら心ゆくまで友と語らひ、すき燒に朝まで飲み明した、何處にゐても雨

喫茶と洋食

キリンテーハウス

中央放送局から東二丁商科大學へ出る角のでまる

（天王寺區烏ヶ辻町）

春の夜は詩人でなくてもなんとなくけだるさを感じるものです。

まして詩人には堪へられない哀愁ともなるものです。

香り高き酒と美しい日本娘があなたをお待ちしてゐます。

是非お遊びに……

（川柳家楓林君の組營）

は好きなものゝ一つです。
飲みあかす酒に一番鷄がなき
醉ふてゐる手は面白く炭をつぎ

十八日　中座觀劇のゝち觀月居に一泊。
かんぴんで酒をのむ。つくづく酒のみになつたことを想ふ。
友達は咳して待つてゐてくれる

十九日　粉雪の降る町を觀月君と共に歩き朝食と酒。晝まへ氣嫌よく別れてひとり有馬へ發つ。心さびしく感じながらも去年の暮にきて泊つた宿に着く。
山の雪宿の二階の磵子越煙突も見へず有馬の空は澄み大阪を考へながら吸ふ煙草わが部屋にひゞいてありぬ咳一つ獨酌のおそろしき事を考ゆわが影が一つ障子にうつる夜

二十日　この町の情緒にふさわしい感じの床屋でさんぱつをする。日の暮れ方鳴玉君來る。二人で瀧を見にゆきすつかり暮てから戻る。入湯のゝち酒盃を手にした事は云ふまでもない。
働くが勝ちだとひとり宿の晝
虫地獄紙を燃せばふつと消へ
瀧へゆく道で叫べばこだまする
瀧へきて仰げば月と水の音

二十一日　朝の湯にひたり、朝酒に宿を

社告

三月十三日心齋橋食堂にて本社社友會を開催し豫て特別社友から提出されてゐた社規改正の件に就いて一同協議の結果特別社友、維持社友の名義を左の通りに變更した。

特別社友　を　同人
維持社友　を　社友

單なる名義の變更といふだけでなく之によつて本社の面目を更に一新し益々協力して社の主義主張の貫徹を期する事となつた

川柳雜誌社
主幹　麻生路郎

發ち寶塚へ徒歩で行く。かくしてあてのないのんきな旅はおわる。
竹藪の下に鮮人小屋が見へ
この夏はキャンピングする事を云
アンテナがある村へ着く晝さがり

◇新誌友

本誌普及のために愛讀者各位の御盡力によつて益々讀者が增加してまいります。本春から御紹介者と新誌友の御芳名を本誌に揭げてその御好意を感謝してゐる次第です。何卒此際意義ある川柳雜誌倍加運動を起し讀者一人が一名の新購讀者を御勸誘下されるならば本誌はより良き川柳雜誌となりますから川柳家に限らず社會一般讀者の御紹介を願ひます。見本として川柳雜誌をお送りしますから御申込下さい。（三柳子）

「川柳雜誌」半年分前金金壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友としてこゝに芳名を錄します。（四年三月十七日まで）

永田里十九、川村觀月、姫田賀名芽（梅田支部）市原硬、杉田貞之（長崎柳秀）三好計加、河野雨桂（淺井冷々子）西村あい子（若井たけし）野田德松（永井草明）前田吉太郎（住田亂耽）三條東洋鬼（庄萬よし）水山爲繼、（桑原京郎）中山愷男、小山豐次郎、永島二水、白井梅里、伊豫川登喜治

國安尊夫（事務所）括弧内は紹介者

一路集

【募集句】

女優

川村花菱選

プロマイドだけの女優に親めり　穂波子
隣村からも女優につゝぱしり　琴人
あこがれの女優となって二階借り　萬樂
藝術に生きる女優で治まらず　黒天子
噂から噂へ女優さからはず　南窓
すみ子だけ母は知るてプロマイド　高峰
勘當は女優の家でチト暮し　一舟
かき眉毛すき女優をちよつと眞似　代筆
のサインへ女優目もくれず　一柳
うちとけて話す女優のコンパクト　綠之助
金になる笑ひ女優のあからさま　同
駈落もして來て女優臺が立ち　伴内
女優劇もと帝劇にゐたと云ひ　同

（佳句）

ほんとうに笑って女優おもしろし　綠之助
蒲田からあつけなく署へ渡され　高峰
いゝ噂女優この頃やめて居る　たけし

土

（微苦笑）

鶏は何思ふてか土を掘り　小六
筍の土そのまゝで秤られる　時雨郎
南米は土いぢりより何もなし　市公
臨終も樂であつたと土をかけ　文芳
その土が人形になり猪口になり　喜由

福田山雨樓選

御最負の期待に背く土がつき　萬樂
戰場の土を握つて死んでゐる　悟空

（思索）

土の底秘密のやうに見ゐるなり　悟空
一鉢の土にいのちを托してる　淡水
たがやせばたがやすだけの土の色　今雨

川柳類題索引 (3)

川柳雜誌自第一號至第五十九號

安井ひろし　越村如香　安井欣女　共編

題の配列はすべてABC順、題のトの日本數字は川柳雜誌の號數、算用數字は其號の何頁を表はす。例へば責任四七50は第四十七號（第四卷一二一號）第五十頁の如し

（一）人情、風俗　人事、身体

病氣（3）

S（ツヅキ）

責任　四七50
素人　四九40
さゝやき　四九53
寒がり　五〇57
差向ひ　五一50
借金　五二15
神經　五二50
戰爭　五三48
相場　五四51
生　五四53
出獄　五四55
消息　五五55

誓文　四八69
逆立　四九50
匙加減　五〇53
進む　五〇60
五三53
再會　五二48
察　五二52
信用　五四50
惜別　五四52
新兵　五四54
聖人　五五52
仕事　五五58

土を縫ふ木の根闇から闇に伸び　同
黒土を破つた其芽春の色　鐵洲
土掴れば絞りきつたる水が湧き　雪緒
一塊の土膨らんで春の色　たけし
土を掬へば土のぬくもり　豆秋

（土の香）

春泥へ高下駄の塗り光らせて　琴人
頭を揃へて葱の芽土を出る　東狂子
土盛ればやがて軌道となつてゆく　觀月
土の色まぜて初雪掃きよせる　高峰
土運び今日も陽氣な唄になり　竹堂
土手一つ向ふに何かある花火　天絲
種活けた土の黒さに雨けぶり　木偶人
耕した土に秋の日暮れかゝり　青水
雨晴れたあと山茶花の土に埋れ　美一郎
麗らかさ乞食に大地親しまれ　伴内

（感傷）

貧しさを忘れて菊の土を堀る　重陽子
堀りかへす土に親しみある香ひ　同
土へ來て野良着の香ひなつかし　木偶人
口笛吹いて土堀りかへし　豆秋
土の香に　なじむ　恩給日の永く　萬樂
感傷を赤土　山で　唄ふなり　綠之助
土踏めば足の冷さ　春であり　沒食子
感激の俺の土　間の冷たさ　たけし
土運ぶ朝鮮人に唄もなし　正春
爪にあるきのふの土にふと脅ゝ　木偶人
ステッキの土のよごれも曾ふた日の　光路
首になれば鶏でも飼はん土の香に　普天

故郷の土に歸れば土堅し　一杉
働きに土を踏んでく足の音　多聞

（佳調）七句

誇りなき身の土に親しみ　たけし
土工部屋死にもやらぬ一人病み　伴内
順々に土人形の乾く色　時雨郎
松風に悲しく土を盛つてやり　雪緒
一塊の土へ希望の根が白し　湖山
土に憩へば雲足遲し　たけし
死ぬる身のうれしさ土の厚ければ　多聞

（五客）

麥肥ゑた土黑々と陽に當り　琴人

寫生句としてよく摑んでゐると思ふ格別のフレッシュさはないが、重々しい嚴冬から拔け切らうとしてゐる早春の氣分が溢れてゐる、自然禮讚の聲、鄉土愛の叫びがこもつてゐる、

お百度のもう眞劍の土を踏み　光路

笑ひを超越したものから、更に又笑ひがにじみ出るから面白い、

土の香をむさぼる如く耕しぬ　東狂子

土と共に生きる農夫の生活は、痛ましくも又野趣に富んでゐる、畑の青さの中に、懸命の努力を續けてゐる活躍ぶりは實に神々しい姿である、句を通じて田園の清新な廣大な閑寂な空氣が身に泌みて來る、

土運ぶトロが霞んでゐる長閑草石

叙法なだらかにして、いかにも句境を生かしてゐる、而し難を云へば、座五が説明に流れ、常套に墮してゐる嫌ひがある、こう

出勤 五五55
失敗 五六43
衝突 五八40
白髪 五八44
神經衰弱 五八50
T
天才 五8
友 六31
罪 九11
隣 九12
テント村 九13
年寄 一〇8
飛ぶ 一〇12
旅人 一二28
手切金 一七12
轉地 一七13
爪 一七23
床上げ 一八29
立膝 二一20
天職 二三23
抵當 二六26
辻占 三〇33
茸狩 三五13
退營 三六62
溜息 三七36
達者 三八35
友達 四一10
退院 四一11
登山 四一44
年上 四二52
誕生日 四二54
得意 四三55
五八48
嫉妬 五七50
眞劍 五八43
サボル 五八45
誓文拂 五九53
五〇57
四〇34
四四58
四五52
年增 一〇16
五六41
四六51
五三50
泊まり客 一二16
連れ 一二22
多忙 二二22
頓服 三二28
五三54
五九51
四六51
五九47
五八49
突然 四〇30
五一56
展覽會 四一12
四一54
取付け 四二53
五三54

した措字によつて調格引きしまり、或る餘韻を齎らす効果もあるが、句作手法上のマンネリズムに陥らぬ樣、心すべきだと思ふ

この土の下で　先代　泣いてゐす　悟　空

實際泣く〳〵死ぬる　人生もあることだらう、己れの非力、不運を託つ悔恨の涙はまだしも、山と積んだ家督を他人に讓る悲憤たまにある非業の最後、さて〳〵靈魂も浮ばれぬことである、構想凄慘を潛む、

(人)南米の土となる氣の船に乘り　吟　水

一家族を擁してブラジル移住の　雄圖に上る　實に悲壯なものがある、萬里の鵬程、異境の苦熱、思へば聲涙共に下るの訣別である、原句中七「土となる氣で」とありしもこのテニヲハは　る肝要也、句主の熟考を望む、類想多かりしも叙法出色なるを採る

(地)土ばかり出て鑛山は行詰り　吟　水

櫻

柳陽選

◇

渦を卷く思想の中の櫻炭　選句者作

散つて行く花の中なる濡佛　同

賞められて櫻一枝所望され　好絲

月曜日櫻の下の大掃除　市公

櫻とは見へず頑固な杖になり　同

池田錦水氏の「川柳入門」に川柳の定義を下して曰く……川柳とは、穿ちと可笑味とを要素とし、嚴正なる律格の拘束を受ける事のない十七字である。……正しく此の句は典型的な川柳であると云へやう、只而し笑ひの爲めに可笑味を搾らへ上げ、川柳の爲めに皮肉を弄すると云つたふうな句作衝動を肯定したくないと思ふ、題詠は叙法習練上の一手段なることは認められるが、これが爲め實感に卽した句を疎んずるが如き傾きがあつてはならぬ可笑味の溢れた句として推賞したので、此點を懸念して句作態度に言及したわけである

(天)また一人また一人土に眠りぬ　田郎

人生の大團圓は餘りに淋しい、

疊み句として光つてゐると思ふ、

中野柳陽　松丘町二　共選

爛漫の櫻は圓い影を見せ　喜由

皆勤を冷やかして居る櫻餅　雪緒

散り出した櫻に茶店氣を落し　同

廣告の雪洞咲いて灯がはいり　文芳

公休日早い櫻へ連れが出來　同

七夕　四四54
短氣　四五54
旅立　四六44
年玉　四九56
共稼　五一54
立聞き　五一56
手土産　五二54
投票　五四53
辻斬　五八43
立話　五九52

U

轉寢　四18
噂　五12
嘘　十六12
着　一七11
薄　二五22
賣切れ　四〇33
賣上げ　四八66
賣出し　五一52
賣切れ　五五54
自惚れ　五八50

W

若盛り　五14
割前　三三33
若死　四九58
笑ひ　五〇52
別れる　五〇54
若侍　五九43

Y

湯上り・夜櫻　九14

四〇

五五59
五三52　つり錢　五四52
當選　四八63
五四55　五一54
他人　五二51
得心　五二55
追悼句　五七50
焚火　五八50

四八69
四七41
四二52　浮氣者　五二33
占ひ　二一10
腕まくり　三六61
梅見　四四55
五一15
五八39

忘れ物　九14
四六53
五五53
若返り　五二48
卅五12
五二53

當も無く來たが櫻の下に立ち　今雨
見事さを聞かされて居る櫻餅　天絲
一小隊櫻の下で銃を組み　突支坊
八重櫻春の名殘を咲きほこり　山茶花
馬鹿さはぎ他所に櫻は散って居る　柳狂
煙突を見下して咲く飛鳥山　同
物おもふ宵を靜かに散る櫻　青木
ありつけぬ職に櫻の咲き揃ひ　テルホ
門衛の眼にも開放した櫻　湖山
春を向けて呑む盃へ浮く櫻　吐向坊
物干に櫻が散つてあたゝかい　伴内
物乞ひノンビリ花をあびて居る　時雨郎
下り發車掌櫻を折つて行き　波紋
花の下仲裁人も醉つて居る　光路

○

市の牛櫻街道を曳いて行く　雪緒
世をすねた顏へ櫻の花が散り　森本
葉櫻の短冊春の名殘なり　小六
出張は早い櫻を見て歸り　高峰
花散つた枝のみ醉ふた手に殘り　柳狂
先登の息をついでる山櫻　東狂子
此の櫻折るべからずと書いてある　鬼逸樓

◎

信心に來て夜櫻へ連れになり　文芳
逝つた子は散つた櫻のそれの樣　耕民
簪のように藥家から櫻　雪緒
冬枯れの櫻に折るべからずの札　山茶花
懷を櫻に見られまいとする　鐵洲

（感　吟）

（イ）櫻見に成ぬ心を置くベンチ　由郎
（ロ）はかなくも思出さる櫻ん坊　テルホ
（ハ）石投げて見たい櫻へ陽が落ち　木偶人

整理後の感想

年末年始吟にも增して恒例の如く課題吟として春毎に吟じ盡されて居る櫻については千句に近い應募吟句の大半が耳新らしきものとて無く類想の多きも又驚くに足らずシカ有るべき事と領かれしのみ應募句中たま〳〵私の數年前の作たる灯を入れてからの櫻は見直され、の句に接したる時偶然一致したる作者との心境に微笑を禁じ得ざりき。

二點句に取つた「此櫻折るべからずと書いてある」句は句調着想共平凡非凡は句に接する人各々に依り大なる差異のある事を思はされつゝ捨て棄れたるものが有つた。

感吟のイロの二句は大半の想を陽なる方面にそゝぎたるに反して櫻を陰より觀た

靈幽　十八14
行末　廿三13
嫁入前　廿三23
約束　廿八27
浴　卅二32
夜學　三六24
野暮　四〇30
宿替　四二52
世渡り　四二58
慾　四四54
夢　四五53
病み上り　四六52
籤入り　四九59
夭折　五一55
夜遊び　五六48
安賣　五九46
前借　十七16
全快　三五35
懺悔　四一47
座談會　五六48

Z

五三54
厄年　廿五11
卅九11　四〇32
呼び捨て　卅五34　五九52
喜び　三八35
豫定　四〇31
五三53
夜逃げ　五三54
油斷　五九43
湯歸り　五九47
四六53
四八65　四八71
火傷　五九53　五七52
五〇56　四九54
三九46　五八50
前途　五〇53

（二）職業、職名（1）

A

後押し　二六27
按摩　三九43
尼　四六48

B

四四56
四九59　五三48

辯士　三一29

D

番臺　五七46
大工　三16
大臣　十八13
五一52
代診　二九19

るの感あり作者の体驗による句かゝ＝キ觀句としての深みと重味に共鳴する多くを持つ私の心は動いた。

「ハ」石投げての句は全く獨創的にして作者の心境を覗ふ時そこに憑戯か小反抗かさらに一轉思ひを廻せば夕陽を受けて血潮の凝結とも見ゆる櫻花に魅せられたるが如き情景が浮び來つて知らず強い力に引きづられた。 二・二五

◇ 町 二 選

夜櫻のいろに迫つた濃ゆき闇　樂山人
夜櫻をだしに首尾よく誘ひ出し　菊路
夜櫻へ咳をうつちやる懐ろ手　雨月
夜櫻も子はボンボリに氣をひかれ　柳水
一人旅それぢや夜櫻見て發たふ　冷々子
注連なごを張つた櫻は咲いてゐず　ひさし
出張は早い櫻を見て歸り　高峰
煙突を見下して咲く飛鳥山　東狂子
先登の息をついでる山櫻　京郎
花の山莚距てゝ悠氣する　坊
櫻狩入家の女中見染められ　賣茶亭
爛漫の櫻はまるい影を見せ　喜由
花を見る心になれぬベンチに來　青二路
櫻見る土堤へ工場の響く音　湖山
職工と見ゐず櫻の下の聲　市公
一小隊櫻の下で銃を組み　突支坊
櫻咲く國に生れて炭坑夫　天絲
櫻咲く頃慢性の胃が痛み　耕民
櫻咲く丘をうるさく馬子は抜け　たけし
尼寺のあつけらかんと櫻咲き　京郎
別莊の留守番だけの櫻咲き　悟空
背むけて呑む酒杯へ花が散り　吐句坊
世を拗ねた顔へ櫻の花が散り　黒天子
散り出した櫻に茶店氣を落し　雪緒
物干に櫻が散つて暖かい　伴内
忘れてたやうに咲いてる遅櫻　美一郎
八重櫻ゆつくり後で咲いてゐる　山茶花
葉櫻へ泣きたい愚痴となつてゐる　獏々
(佳)當てもなく來た櫻の下に立ち　今雨
(佳)ホンノリと醉ふ頃は花を賞め　光路
(佳)懐ゐ櫻に見られまいとする　鐵州
(佳)はかなくも思ひ出した櫻んぼ　テルホ
(佳)響のやうに藥家から櫻　雪緒
(人)病室へ櫻の明るさがさして　綠之助
(地)石投げてみた櫻へ日が落ちる　木偶人
(天)信心で來て夜櫻へ連れになり　文芳

丁稚 四二46 四五56
易者 四三51
E
F
古本 三五32 三八35 五八46
古本屋 四七28
婦人記者 五五49
古着屋 二三10
G
藝人 一二39
行商 二三9
下宿 二七33
外科 四五54
藝者 五〇50 56
下足番 五七50
銀行 二〇21
吳服屋 四五52
下女 五五58
三八32
H
百性 一五11
齒醫者 三〇32
ホテル 四六47
本職 五四30 30
ハッタリ屋 一七16
花賣 四五51
博士 五五52
I
市場 一五13
色街 四七24
院長 五七51
石屋 二五19
醫者 四八65
J
重役 五四49
女店員 五〇59
上燭屋 三〇34
女給 三二
巡査 三七83
女工 四四59
五一56
四八67
五五54
四七49

「土」の句を選して

福田山雨樓

◆課題吟『土』の句稿を受取つた刹那、自分の頭にひらめいた喜びと期待とは『郷土川柳』の出現につながれてゐた。土の香の句ふ句そのものであつた。どんなに清新な、爽快な土の句が詠まれてゐることかと、自分はおのゝきさへも感じながらその鑑賞にベストを盡した。けれども遺憾乍ら頂戴した句は餘りに尠かつた香ひしたゝるやうな清新な句は遂に發見し得なかつた。郷土川柳の出現は、冬枯の野に若草をあさるそれのやうに未だ求め得べくもなかつたと云ひたい。

勿論自分の不敏にして、思はざる逸脱を敢てせしことなきや只之れおそるゝのみであるから、叙上の言葉は僕一人の鑑賞圏内に於ける臆斷であることは不悪諒承を乞ふ次第である。

何がさて人間に最も親しみのある土である　自然の肉塊・田園の生命たる『土』の姿、魂は如何なればそんなに、川柳との機縁を拒んでゐるのか。郷土川柳は何故吾人の耳朶に遠ざかつてゐるのか。

◆尤も單なる一題詠『土』によつて、直ちに郷土川柳の消長を云々することは不可なるは言ふ迄もないことであるが、せめて斯様な課題の下にその清新な、爽快な境地の片影なりとも覗ひ求めたいと、願つたことはあながち不當な期待でもあるまいと思ふ。然るに鑑賞の結果はそれ等の期待を見事に裏切つて、概念の句、説明の句、皮想の句、空想の句が隨所に散見せられたのであつた。そして投句者八十七名六百句の中から、全没の數が可成り澤山にあつた。尤も右投句者の約七割は都會生活の方々であるから、勢ひ都會人の見たる『土』の句の多かつたことも止むを得ないだらうし、概念の句の大半を占めたことも亦免れ難い徑路であつたかも知れない。沒句に對する選者の感想も併せて披瀝するの責務を感ずるものであるが、題詠の根本義に迄遡つた理論はぬきにして、特に目立つた二、三の通弊に關して指摘するに止めたいと思ふ。

◆概念の句が非常に多かつた。概念は詩の殼である。そこには何等のうるほひも興味も湧いて來るものではない。熱いと云ふ概念が飛び去つてこそ、火事場の危急は救はれるのである。深い鋭い實感を壓搾し濾過してこそ、生彩ある川柳が生れてくるのである。冷たい西風、暖かい人情の眞只中に身を晒してこそ、自然と

人生の胸奥に觸れることが出來るのである。課題吟『土』は川柳の爲めの土に非ずして、土を通じたる實感の習作でなければならぬ。實感に根ざした句が尠かつた。

渡り鳥故郷の土を戀しがり
土臭いなどと息子は都へ出
堺筋ときゞく土を戀しがり
お百姓土を離れて生きられず
鉢だけの土に芽生えて春を見せ

こうした句はもう一度作者の深い心境から、出直して來なければ詩への進展は覺束ない大膽に勇敢に概念の殼を破ることだ。

これは獨り句作の叙法や、表現にのみ必要なことではない。寧ろ句を產む心境、即ち川柳眼を展開せしむる上に於てより緊要な發足である必ず間違えてはならぬ入口である出口である。表現は自分の好いた所へ出てもいゝが、一旦入口を間違へると元の入口へしか出られない。川柳をよりよくする爲めに、概念の入口を堅く封鎖したいものだと思ふ。

◆説明の域を脱しない句も可成り多かつた。説明は他人の爲めに辯じるのである相手を諒解せしむる手段である。ぢこ迄も詩に逆流する理智の所產である。そこに掬すべき感興の耙りやう筈がなく、人を動かす感銘の湧かう道理がない。只徒らに事象の説明を五七五の定型にはめたこて、川柳になるものではない。説明は板のやうな平面的なもので、これをその儘敷き並べたのでは無味乾燥である。恰も人の歩行が平凡單調な繼續であるそれのやうに……けれども一度人が走り出したり、踊り出すと決して單調平凡ではなくなる。足は同じく大地を踏んまへてゐるのだが、その波動は必ずや人目をひき驚異を發散させずにはおない。川柳はいつ迄も説明の階下にあつてはならない。二階四階五階と立體的に飛躍を續け、詩への完成を辿るべきである。

恩給がついて故郷で土を掘り
ブラジルの土に成ると賴母しき
土の香を嫌ふて里は日に寂れ
街路樹へ土はいさゝか仕切られて

佐渡の土昔も今も人が好き

同じ説明の句でも、巧みに穿つた內容を盛つてあるのもあるが、説明と云ふ散歩姿が句を浮ばさない。川柳がメスであり、催笑劑である限り、立体的な活躍相を、音樂的な特異性をその表現の上に求めてゐることを肯定しなくてはならない。

◆郷土川柳の出現！それは題詠の所產として、あまりに生ぬるい期待であつた。事大的な嘱望であつた。それよりか課題の如何を問はず、先づ以てお互ひがその誤つた低徊氣分から目覺めなくてはならぬことを痛感するものである。概念の邪路に踏み入つたり説明の領域にうろついたりするやうな淺薄さから、更に一段の勇躍を展開を望みたいと思ふ。思はず自分は不遜な用語を羅列したことを陳謝せねばならない。けれども川柳への憂心から自己鞭韃、柳友提携の念願より他意ないことを諒とせられ、幸ひ叱正の勞を賜はんことを望む次第である。

淋しい川柳

◇◇三輪五輪◇◇

ロンドンが歸つてくるか身重なり

路郎師の句は淋しいと言ふ事はよく聞く言葉ですが私は其の淋しさが路郎先生の生命であると共に川柳の生命であると思ふのであります。皮肉とか諷刺とかユーモアーとかが川柳の一要素を成して居る事は勿論でありますが最も眞劍味のある句は淋しい句に多いのです。

淋しさと言ふ事は人間が本當に我に歸つた時起る感情であつて其處には傷りがない筈であります。換言すれば面白い句皮肉な句は上の空で作り得ても淋しい句は上の空で作り得ないと言ふ事に成ります。

きのふけふ起請の指の冷えて居る

（武玉川初篇）

昔から傾城の事については數へ切れない程讀まれて居ますが、此の句位彼女等の立場を鋭く言ひあらはした句は有りますまい。

傾城の淋しく成ると名を替へる（柳樽）

此れは皮肉です。私は此んな句を通俗川柳とでも稱し度いのです。

見詰ても戀しい足しにならぬ空

（武玉川五篇）

一見昭和の句の樣ですが故人がはつきりと申して居ります。片思ひをして居る者に取つてはたまらなく慕しい句です。

川柳は善良な家庭に入れられない物だとさえ言はれるのも今日の川柳界の實狀では勿論であると思ふのです。川柳と言へばやたらに反感的な皮肉であり、無暗にくだけ過ぎた物であるからでありますが徳川時代から明治大正昭和と進んだ今日徳川時代に於てものした所謂通俗川柳の後を追つて居る樣では川柳は容易に浮ばれますまい。

路郎先生が或意味に於て異端者と見なされ四面楚歌の中に起つて務められて來た事は私達の大いに感謝して居る處であります。さながら談林貞德の通俗俳句の中から鮮かに一線を畫した松尾芭蕉の樣に。

けれど悲しい事には笛吹けども人踊らずで川柳雜誌の同人中の人々ですら路郎師と異つた道を歩まれて居る人もある樣に思はれます　要するに川柳を人格的（一寸變な言葉ですが）にするには淋しい句を作る傷りのない句を作ると言ふ事が目下の急務であると思ふのであります。

さりとて私は文學青年者流安價なセンチメンタルを好むのでない事をはつきり申上げて置きたいと思ひます。

猫の子が死んで坊やのおともらひ

各地柳壇

川柳雜誌社　三月例會

三月五日夜　於日本橋倶樂部

詩情をそゝる春宵に催された本社例會は珍らしく吉田きよし、柴谷柴舟二畵伯の來會あり、下記の如く多數柳友の參會をみて、非常に盛會であつた。

席上路郎主幹は澤正の死と革新的生命力の偉大さについて說かれ、ものの見方について童心に歸り、ものゝ眞實を摑まん事を力說された（二柳子記）

（參會者）

路郎、淸、柴舟、琴人、多聞、五輪、一杉、テルホ、露斗、桂風、淸水、文蝶、杏三、九三也、双虎、柳笑、悟空、黑天子、雅流、賀名芽、鼻岐、觀月、石竹、やなぎ、鳴玉、香仙、沐天、雪峰、沒食子、善治、かほる、卯三、文久、蒼梧樓、亂耽、里十九、瓢山、陽喜亭、勇宗、突支坊、十紫、きくを、つばさ、小六、喜由、武子、鶴峯、丸葉、柳、萬樂、明果、楢雨、虛白、玄洋、双柳、美都路、かすよし、鴻堂、貴山、傳秋、赤丹、萬よし、ひろし、加香、二柳子

兼題　洋　行　　路郎選

洋行に一つこつもなつかしや　鳴玉
歸朝者の中に離子方もあり　里十九
洋行をしたさに次席勤めて居　かすよし
洋行へ妻のテープは先きに切れ　勇宗
洋行の儘よと思ふ時もあり　一杉
洋行の人には見せぬ日記帳　玄洋
洋行に裸踊は見落さず　五輪
小便をしにマルセーユ迄出掛け　柴舟
洋行の噂さ養子も本ぎまり　十紫
洋行と云ふ命策に乘せられず　ゆずらん
洋行は祖母と玄關から別れ　雅流
布哇からの便りに櫻眞つ盛り　淸水
何もかもアチラずくめで歸つて來　蒼梧樓
後見の伯父が預かる洋行費　鴻堂
洋行を前に助敎授よく笑い　楢雨
洋行の妻君行つたように云い　琴人
老敎授まだ洋行がめぐり來ず　杏三
櫻咲く國を筥崎丸は發ち　鮎美
洋行の漫談へちとけちなつけ　同
洋行を島田はあつい眼で迎へ　小六
洋行を送つて歸る長い繃　同
面富てにひとまづ日本から離れ　亂耽
洋行の朝晩一人ぼつちなり　同
ロンドンで通譯にはぐれさうになり　賀名芽
洋行の父へ兩手をあげて見せ　同
（軸）戀は儚なく日ツ本を離れて見　路郎

視察ごころか迷子のニューヨーク　同

席題　繼　母　　文久選

繼母にせめても俺の健康よ　鳴玉
繼母の義理に家庭も丸くたち　やなぎ
繼母はたゞでぶくゝと肥えた人　萬よし
繼母と別な心で窓に立ち　杏三
繼母の目でたしなめる人の前　突支坊
繼母は煙管を握る癖を持ち　梧空
繼母さんと眞直に子供口に出ず　喜由
繼母が來て座布團が派出になり　かほる
繼母を成人をして繼母へ無理を詫び　萬樂
繼母の一つ判らぬとこがあり　石竹
繼母のもとで十六まで育ち　觀月
繼母にかくれて髮を梳いてやり　多聞
よく流行る店に繼母老いて行く　一杉
繼母の留守を知つてる出前持ち　雅流
繼母に肩掛が出來帶が出來　淸水
なかゝに繼母二錢くれぬなり　桂風
當然の事を繼母ほめられる　双虎
繼母をほめるを子供淋しがり　同

繼母にピアノの好きな長女居る　榎雨
（客）眞實の母とは違ふ足袋を穿き　同　健舟
（客）やはりいゝ母でしたよと涙ぐむ　黒天子
（客）繼母とうまを合して肩がこり　沐天
（客）冷切った指を繼母くうつと締め　武子
（客）繼母の暖かい茶を茶をすゝり　清水
（人）暇のいゝ嬢酒に繼母も起き居り　文久
（地）繼母の尋づれて吳れの傷へ卷き　玄洋
（天）繼母の願ひ產まない事であり　同
（軸）待たせたと思ふ繼母先に着き
繼母の化粧眼のうら熟くなり

席題　宿直　多聞選

宿直の手に朝刊が渡される　つばさ
宿直が置き忘れたる壇の浦　きよし
宿直を知つてか彼女訪れ來る　暑岐
宿直へ夜泣き屋一つ賣れゝ行き　雪峰
宿直はマッチを貸すに念を押し　文蝶
と思つた足音宿直へ通りすぎ　テルホ
小便の話に宿直起き直り　二柳子
宿直がゆつくり彼女へ電話する　賀名芽
宿直の寢るには惜しいストーブの火　勇宗
小便の酌で宿直飲んでゐる　善治
電報を讀んで宿直二時を聞き　杏三
宿直へ電話降つても明日行くか　突支坊
宿直へ電氣炬燵は暖まり　檜雨
新聞を綴り宿直水をつぎ　石竹
ぐつすりと寢たを宿直うるたへる　柳笑
小便に宿直將棋差し負ける　五輪
宿直へうどん鉢一つ三つ四つ　鳴玉
宿直は冷たい夢をあきらめる　赤丹
宿直は夜鳴きへ走る暇は持ち　喜由
宿直のポケットにのこる南京豆　雅流
宿直の向ひの暗いビルヂング　同
宿直へうどんや細うくゞつて來　陽喜亭
宿直は氣兼れのいらぬ酒を飲み　同
外は雨宿直今日は飲むつもり　蒼悟樓
碁を打ちながら宿直印を捺し　同
宿直は赤い草履でれめまはし　貴山
宿直は事故をはつきり聞き直し　同
譯あつてする宿直を疑はれ　桂風
宿直は寄寢ときめて早い飯　同
糸卷の繪に宿直の懷しく　文久
宿直へ淋しうまの合ふたこと　同
ズボンの儘で宿直寛がず　一杉
宿直の預つてゐる包み物　同
宿直へ週間朝日物足らず　萬よし
宿直日記私信を終へて無事と書き　同
短篇を書く氣宿直灯を下げる　亂耽
宿直のナイトキャップは宵のもの　同
宿直の足につかへるものがあり　双柳
宿直のハイシライスで濟ましさき　同
宿直を女房電話でたしかめる　路郎
泊り番電話の聲もなつかしく　同
宿直は古いレコードかけてゐる　悟空
宿直は葉書をかいて寢ると決め　同
宿直の電話淋しさ云ふて切れ　同
宿直がおごるは何かあてがあり　里十九
宿直の留守へ父親たづれて來　同
電話から宿直いこうかしこまり　同
宿直の耳に柏子木丈けの音　黒天子
宿直をもう知つてゐる交換手　同
宿直の電話へ冷えた聲を出し
（人）宿直は戎橋迄行つて見る　黒天子
（地）宿直の筈が圓タク何處へ行く　杏三
（天）火事は何處だと宿直王手なり　路郎
（軸）幕かけたこと宿直明けて來る　萬樂

席題　惡戯　互選　多聞

學校で惡戯今日も立たされる　雪峰
札附のいたづらが來る夜學校　五輪
惡戯もすぎては居るが叱られず　沐天
いたずらの子に裏町の日は暮れて　清水
惡戯の足ごり後ろすきだらけ　喜由
惡戯は惡戯として可愛がり　文蝶
いたずらの側で父親笑ふだけ　突支坊
いたずらを末たのもしく見てる父　丸葉
惡戯を叱つて母は水を汲み　二柳子
はげ叩いてみる我子のいたずらさ　文久
親なぶりする惡戯な子に育て　鳴玉
兄ちやんの寢顏へわるさしたくなり　善治
惡戯もあんまりですと下女ふくれ　小六
惡戯の一人巡査を見つけたり　鴻堂
家出した後で惡戯者と知れ　暑岐
いたずらの出來ない子にも困りはて　雅流
男の子蜂に刺されて戻つて來　觀月
惡戯と知らずしよんぼり待つてゐる　黒天子
いたづらに書けば社長の顏に似て　露斗
惡戯にしても落書ほめてゐる　勇宗
惡戯がすぎて裸で戻つて來　卯三
いたづらに心うごかす年でない　武子
番頭のする惡戯に墨を擂り　かほる
逃げ支度して惡戯が續けられ　柳笑

われた音悪戯急にあらたまりいたづらの仕方が違ふ子といはれ血の出てることを悪戯知らぬなり悪戯はガラスのかけを捨はされ悪戲の子を賞めてゐる父の酒物干で見てると知らず泣かして居悪戲にそれ〴〵棒の長短か

同　桂風
同　テルホ
同　亂耽
同

席題　一　皿　互　選

テキ一丁女給素足で持つて來る　雪峰
取あへず女給一皿通しとき　鴻堂
一皿を云ふにメニューとにらめっ　十紫
一皿に代りがほしいような味　沒食子
一皿の刺身うれしい父となり　一杉
一皿に盛るが早いか賣れて居る　柳笑
小鉢物一皿ほしい手をたゝき　丸葉
里の母一皿だけでもてあまし　桂風
一皿を圍んで胡弓へ更けて來る　勇宗
一皿は酒飲む人へ別に來る　文久
一皿の出前を逃げてコンバクト　文蝶
出前あげ一皿たらぬ指をくり　陽喜亭
得心で來た一皿へぐちが出る　双虎
なけなしの金に一皿づゝの味　蒼梧樓
一皿がツイニ皿となり三皿　突支坊
一皿のおはぎよごれた手へ廻り　悟空
一皿をべろりとあけて丁稚立ち　善治
居候一皿足らぬ膳につき　虚白
はづかしいまゝで一皿だけは喰べ　テルホ
かげ膳と一皿別に取つておき　つばさ
一皿の飯飼犬の鼻が鳴り　萬樂
一皿にいろ〳〵入れて二階借　亂耽
一皿を中に抱貧をのべをはり　亂耽
一皿は氣違ひじみた顔で食ひ　路郎
一皿の事を刑事に責められて　玄洋
一皿を殘して母は立つたまゝ　同
白煙蒙々と一皿の客　双柳
一皿が時計ばつかり見てるなり　同

川柳雜誌社　社友懇談會

三月十三日夜　於心齋橋食堂

當夜路郎主幹、二柳子、萬よし、かほる、舟々新水、双葉子、亂耽、愚陀、鮎美、ひろしの十一人參集、別項の社告の如く社の發展策につき懇談、一同胸襟を開いて相語り、愉快な一夜を過し十一時過散會（ひろし記）

席題　衝　立　互　選

衝立へ來て取次の眞面目なり　愚陀
門をはるかに衝立が見え　双葉子
衝立へすつくと立つて姉藝者　ひろし
衝立に隱れてしまふさし向ひ　かほる
衝立は大家と申す幅をとり　萬よし
衝立の後に姉の小聲なり　二柳子
慶びの使者に衝立のけられる　鮎美
衝立のだるまへ朝の陽があたり　同
衝立を廻ると急な段梯子　舟々
衝立の古きも哀れ賣らるゝ日　同
衝立の端へ消へてく裙さばき　亂耽
衝立をうしろに小作對地主　同
衝立もよしあし同じ酒に醉ひ　同

川柳雜誌社神戸支部

三月例會（神戸）

三月十五夕　於四宮神社々務所　楊井　二南　報

人の心もそゞろ浮き立つ春三月、柳友二十餘氏を迎へて作句三昧の夜を更かす珍客新人數氏あり、紋太氏の懇切なる句評益する所多し。

席題　押　賣　互　選

押賣に麻雀の音するばかり　一狂
押賣に息子且那と云はれてゐ　華水
中毒か押賣の手は振へてた　竹風
押賣へ男同志の聲になり　重陽子
押賣を見てそれ〴〵に走り込み　非風
押賣はのんびりとして腰を据え　志郎
押賣へ子供の聲が強すぎる　二南
高飛車に出て押賣へ氣がとがめ　同
押賣をじつと見てゐる女の子　鮎美
押賣へこんど貰ふと鷄を追ひ　同

席題　探　偵　かほる　選

探偵の連れてる犬の尾が動き　重陽子
窓椽の指紋へ探偵助手をよび　竹風
探偵は益々ひどい不眠症　一狂
探偵の假裝となつて大寫し　嶺月
探偵へ底冷えのするピルヂング　亂耽
探偵と知らず噂のまゝ喋り　志郎
古痕を附かれ探偵夜を更かし　同
探偵はちよつぴり呑んだとこで止め　二南
探偵の足も踏まれて歸るなり　同
探偵は近所でこわい人にされ　九葉

探偵はいつちあとから降りて來る　同
探偵はすばやく化粧室に入り　鮎美
思はくのある探偵はぽちをきり　同
（軸）探偵に夫人の心つかまれず　かほる

席題　沿　線　ひろし選

沿線に日向ぼつこの屋根が見え　華水
沿線へボツン〳〵と建つて行き　九葉
靴の泥から沿線の愚痴が出る　卯生
沿線の家賃を聞いてみたくなり　嶺月
沿線に住む冥妻とうなづかせ　二南
沿線へ重たい足になつて去に　同
沿線の朝晩風が生きてゐる　亂耽
沿線へ移りしばらく筆を絶ち　同
沿線は釣瓶の音に目を覺まし　毒仙
沿線のまだとけきらぬ屋根の雪　同
池から鮫から沿線は暮れてゆき　紋太
沿線の夜は村らしく牛の聲　同
（佳）沿線に住む相談に子を寢かせ　二南
（軸）沿線をはなれ淋しく子を育て　ひろし

席題　團　長　嶺月選

團長が今日は自腹を切つてくれ　揚花
學歴を團長少し持つて居り　九葉
團長の力强さが聲で知れ　重陽子
團長をえらい人だと思つてゐ　華水
活辯の眞似へ團長笑ふなり　亂耽
團長と割前を出すものを食ひ　同
團長の話英語が混るなり　二南
團長の聲にコップの水が搖れ　同
見て來いと云ふ團長の太い聲　紋太
團長はいつに似合はぬ風邪をひき　同
團長は靜座法など心得て　鮎美
日に燒けてくる團長の健かさ　同
初對面もう團長と笑ひあひ　同
（人）團長の聲が投手は耳につき　一狂
（地）團長の不平は旗の影に立ち　二南
（天）敷鳥を切る團長に戀があり　九葉

兼題　二　階　紋太選

干渉をさせず二階に息子ゐる　一狂
晩酌へ二階の趣味が氣に入らず　毒仙
近所から二階をしめる家にされ　九葉
二階借今日來る客を賴んどき　揚花
二階から就職難は朝の風呂　山雨樓
日曜がわけなく暮れてくる二階　同
（人）おちついてからの二階を淋しがり　鮎美
（地）二階とは別な氣持の膳につき　二南
（天）上つたり降りたり二階掃除をし　嶺月

川柳雜誌社松山支部　素人先生歡迎句會（松山）

二月廿八日　淺井冷々子報

岩本素人先生が、御令閨同伴當支部を訪れられたので道後岩井屋ホテルで、歡迎句會を催す。降り續る春雨を突いて馳せ參じたのは玄々子、五健、時雨樓、雨眠、大鷲、陽帆、水樹、一止、計加、紫水、鯛頭、壺雪、冷々子。霽れ間〳〵を湯之街らしい流しが默想を脅かした十一時過散會。

題　二　人　連　互　選

邪魔が入りかしこまつてる二人連　紫水
離れても又影が添ふ二人連れ　鯛頭
奥樣と並んで丁稚氣がさがめ　大鷲
二人連れちと明るい夜であり　陽帆
二人りでやつて母親安心し　冷々子
二人連れ言ひ張る方に引づられ　同
二人連れ公園の灯がぼやけてる　時雨樓
二人連何か話して何か喰ひ　同
峠茶屋女の足をたしかめる　水樹
二人連れ金ありまして春の宵　健
雜沓をはすかいに行く二人連　同
二人連れ後になり先きになり　武子
せう事なしの二人連とは知りもせず　素人
電車待つ相合傘へ降りつのり　同

題　流　し　互　選

まだ寢るに早い流しに宿を出る　冷々子
默想の耳へ流しは通り過ぎ　雨眠
聞いてゐる流し段々遠くなり　計加
洟えてゐる流しに若い血がおどり　陽帆
寢そべつた儘へ流しは聞えて來　壺雪
ほろ酔が流しの三味で踊るやう　玄々子
其の邊でもう引返す流し三味　水樹
お茶引へちとあてつけな流し來る　五健
彈き流し柳櫻の町をぬけ　同
眼の覺める樣な流しの聲　武子
それからそれへ流しやつて來る　同
今にも語り出しそうに流し來る　素人
引け過ぎの廓へ流しよい音締め　同

題　實　印　時雨樓選

ハツキリと押して實印逆さなり　五健
呼び出しの實印携帶せよとあり　玄々子
持主も實印の字は讀めぬなり　素人
お人良し實印嫁がかまへてゐ　鯛頭

證明を付けねばならぬ判を押し　水樹
實印を押して貰へばこちのもの　紫水
遺言と實印痩せた手で淡し　素人
只一寸押すに實印ひまか入り　大鷲
迷惑を着た實印の鮮明さ　陽帆
指さした所へオヂギで實印し　五健
(佳)實印を押すにキチンと座替へ　水樹
(佳)金高をも一度讀んで印を押し　大鷲
(佳)書留へ實印押せば字を問はれ　雨眠
(佳)實印へ口一杯の息を吐き　同
(軸)實印と顔と金貸見くらべる　時雨樓
親讓りのでっかい實印　同

題　二十四五　水樹　選

奥樣と呼ばれて見たい二十四五　雨眠
失業のヤケ氣味になる二十四五　時雨樓
二十四五妻が欲しいなと思ひ　玄々子
絹針の樣に育つて二十四五　素人
二十四五もうスポーツも飽いて來る　五健
二十四五何時しか濟んでもの足らず　武子
降る程の緣を斷り二十四五　紫水
向ふ意氣に只勝つてゐた二十四五　冷々子
(軸)三十へ二十四五まで數を讀み　水樹

題　屑籠　素人　選

屑籠を貧ふて舞臺へやつて來る　雨眠
捜した揚句屑籠をぶちまける　時雨樓
屑籠に鼻かんだ紙許りあり　計加
屑籠へ入れられるとも知らず書き　玄々子
藝者屋の屑籠何かいゝ匂ひ　五健
屑籠を一杯にして宿を立ち　水樹
氣短い癖屑籠によく溜り　冷々子
屑籠をもて餘してる二階がり　時雨樓

川柳雜誌社　糸屋町句會（大阪）

新に清水卯三(元柳狂)近藤テルホの二君を同人に迎へ二月二十日夜實業會館に於て同人會開催はるばる京郎君の參加あり、左記二題作句後小さき乍らも熱のある同人會議を開きお互ひに胸襟をひらき昭和四年度を語るに時を知らなかつた。川合舟々報)

席題　橋詰　毒仙　選

口笛になり煙草になり橋詰に立ち　蒼梧樓
橋詰の灯から離れて待つてゐる　舟々
橋詰で信玄袋持ちかへる　京郎
心齋橋北へ渡ると風があり　双葉子
橋詰の時計は進むばかりなり　同
橋詰にまだ相談がまとまらず　源坊
橋詰にしばし日傘が廻るなり　同
(佳)橋詰の風に女のまだ若く　舟々
(佳)橋詰を默つて二人きりの闇　京郎
(佳)橋詰でよう〳〵酒落がわかる友　テルホ
(人)ふと默る癖も淋しい橋の詰　同
(地)橋詰に馬鹿な姿と思ふ夜る　舟々
(天)橋詰は暮るゝ何がしかの溫み　同
(軸)橋詰を心覺へに宿を出る　毒仙

席題　僞刑事　互選

後からの刑事も僞と思ふなり　テルホ
僞刑事が居るからなあと僞刑事　舟々
其の髭を利用して居る僞刑事　新水
僞刑事名刺うつかり忘れて來　源坊
方向を問はれて困る僞刑事　同
僞刑事手つ取り早く捲きあげる　毒仙
僞刑事婆さんなどに用がなし　同
事もあらうに同なじ名前の僞刑事　蒼梧樓
僞刑事段々聲がちさくなり　同
僞刑事ガイと呼ばれてギヨッとする　京郎
一犯の肩書がある僞刑事　同

川柳雜誌社　堺支部二月例會（堺）

二月二十二日夜、於大濱潮湯家族湯樓上
參會者二十二名　友淵貴山報

兼題　地下室　ひろし　選

戀人を待つ地下室の段梯子　兎歩
見學の地下室で足いたみだし　さだを
地下室の手すりヒヤリと冷たすぎ　貴山
地下室に太い柱が目立つなり　不言
ふところ寒し地下室に消え　山雨樓
地下室の壁を刑事は叩いて見　素人
地下室のあきびん照らす十燭光　健秋
地下室と知らず草履をはきかへる　武子
一度二度三度まがつて地下室　同
地下室の棕梠をゆすり入れ代り　多聞
地下室を出て幻滅のアスファルト　同
地下室の窓へ樂しい陽は光り　朝陽
地下室を殉る柏子木強くきゝ　同

席題　自惚れ　素人　選

編棒へ自惚れ何か話しかけ　兎歩
自惚れていりやこそ五十こへてまで　破醉

自惚れの萬年筆にインキなし　貴山
自惚れて居て見合ひが氣にかゝり　武子
淋みしさを自惚て見る春の風　一杉
自惚れへぶつゝり切れた靴の紐　不言
自惚を隅で給仕が笑つて居　萬年青
自惚れのステツキ先がチビてゐる　ひろし
財布落したと氣付く自惚れ　光二
自惚れへ心許ない手紙がき　萬古
自惚れていた時もある日記帳　萬両
自惚れの強い娘の氣が狂い　同
自惚れはモダン氣取りで先へぬけ　呑陽
自惚れの今日は冷たい茶を啜り　同
自惚れのチト氣に掛る靴の泥　素人
（軸）寝た振りを自惚れは風邪をひき

席題　煙　朝陽選

その中の一人煙の窓を開け　兎歩
寝室へ煙のはいる頃に起き　貴山
たいくつはバツトの煙細う吐き　さだを
晝の火事煙ばかりを見て歸り　萬両
一抹の煙人間の仕舞なり　双柳
敷島と同じ煙出す胡蝶　蔓草
煙突に煙出て居てほつとする　不言
丙午空と煙を見て暮し　武子
生きるのも死ぬのも同じ煙の中　同
策戰へ煙草の煙籠つてる　素人
女房を叱り飛ばして煙にむせ　同
（佳）ホネムーン煙に少し座を離れ　呑陽
（佳）煙たいと亭主どなつて子を起し　萬両
（佳）怠屈な事務所に煙ゆるう立ち　貴山
（佳）西風へ煙は一の字になびき　萬年青
（佳）諸共に煙と消える肉を持ち　同
（人）煤煙の中で育つて深呼吸　蔓草
（地）真黑な煙海峡通り抜け　一杉
（天）威壓する葉卷の煙長ふ吹き　萬年青

席題　壽司　双柳選

御土産のすしは卷から箸をつけ　萬年青
一やすみ中山寺で壽司が出る　健秋
湯上りに食ふ卷すしの口ざはり　一杉
エプロンの下に自慢のごもくずし　貴山
遠足にすしでのごつめお茶は無し　美都路
壽司の味ほめて茶ばかり呑んでゐる　さだを
遠足につぶれた壽司のつまみ食ひ　萬古
すしを切る音聞きながら宵寝なり　兎歩
卷すしが好きで長生きしてる母　素人
ピクニツク何はともあれ壽司を抱き　蔓草
仰山に庖丁を使つてすしを切り　同
（佳）壽司の客未だ待たされてる　武子
（佳）尺八に壽司ほうばるも花見なり　瓢山
（佳）衆議一決すしの中食　萬年青
（佳）お土産のすしへ子供を起してみ　朝陽
（佳）キヨロりんとして二皿の握り壽し　呑陽
（人）壽しつまむ手に隱されぬしはがれ　同
（人）先生の宅で出るもの壽司ばかり　かずよし
（地）箱すしの方から山が崩れて來　ひろし
（天）金借りに行て蒸しすしをたべて來　素人
（軸）子をだいて梅も櫻も壽しばかり　双柳

席題　秘密　呑陽選

秘密から秘密の内に別れてゐ　貴山
お互に秘密を明けた堀炬燵　沐天
秘密をばごま化す咳の大きすぎ　不言
うつかりと云つてしまつて秘密なり　一杉
弱點を握り我が儘押し通し　光二
秘密ではあるが誰かが云ひたそう　双柳
セキセイのあだ名へ秘密明されず　蔓草
盃が增して秘密が動き出し　武子
貧しさを語られまじとかくしたき　萬両
出前持秘密ですよと店の事　瓢山
一枚の白銅秘密守つてる　朗陽
秘密會と言つては幹事呑んでゐる　萬年青
極秘密聞けばアツケの無い話　同
其秘密親切さうに聞かされる　武子
（人）四十度の熱へ秘密を打ちあける　素人
（地）秘密抱くとは見えぬ死顏　貴山
（天）子の秘密聞けば人形をこはして　呑陽
（軸）かばかりの秘密に弱い俺を見る

席題　厚司　互選

鰹入に息子厚司で戻つて來　瓢山
厚司一貫淀川の水を飲む　萬年青
脫いでからこんな厚司と思ふなり　一杉
裏口で下女は厚司を待ち合せ　朝陽
外出の厚司錦鈔の帶をゝめ　さだを
その日暮しと云へ厚司ののんき　萬古
免職が結局厚司の氣樂さよ　沐天
圓本の廣告を着る厚司なり　素人
開店にそろいの厚司よく目立つ　不言
厚司から出す敷島の折れかかり　貴山
厚司着てゐても且那は且那なり　呑陽
命ぼたん厚司にかへて何んのその　破醉

席題　廣告　互選

廣告を背負ふて其の日無事に暮れ　沐天

廣告を掘つたままでおされてき　光二
廣告屋子供邪けんに押し分ける　呑陽
終いまで讀んで廣告たよりなし　蔓草
今しばし黒枠にのる年でなし　破醉
廣告忘れる頃に梅は咲き　萬両
廣告は買はれば損のやうに書き　不言
いたづらに廣告マッチへるばかり　ひろし
三行廣告虱殺しに今日も暮れ　萬年青
ぜいたくな紙面を割いて齒磨粉　一杉
一まわり飲んで廣告讀み直し　同
廣告にして面白いトッカヒン　萬古
しょんぼりと廣告を見る子守うた　武子
ぬりたての廣告に朝の陽があたり　同
廣告をくばる女給にふれて見る　さだを
廣告の割に少さい店屋なり　同

川柳雜誌社

螢ケ池支部三月例會

三月六日　家島しげる報

兼題　不思議　ひろし　選

聽診器あてれば坊や不思議さう　笑哉
尋ね來た友ほうがくを不思議がり　一雄
不思議にも釜の鳴り出す稲荷さげ　庄次郎
不始末を棚に不思議を連發し　波紋
眞夜中の不思議な音に寢つかれず　同
不思議そうな顔を寄せて支那奇術　蝶呂久
不思議こその奇術を不思議がり　皎月
彈痕のある御守を母へ見せ　みのる
天理教不思議〳〵ですゝめに來　同
死にましたと云へば不思議さうな顔　瓢簞
諦らめて居た病人が治りきり　福助

お臍から生れた話し不思議がり　柳月
年頃になつて不思議の數が減り　同
不可思議な噂と別にぬる地頭　光哉
氣をつけて觀れば不思議な世の中よ　波紋
身の上を聞けば不思議に生きた人　同
思ひつめ生きてる自分も不思議なり　湖舟
來る年も不思議に寒い御水取　松汀
不思議にも生きてゐたかとしられ泣き　地湧子
不思議だと小遣帳を繰り返し　耳三
種明し不思議な顔がよつてくる　しげる
同

兼題　白粉　ひろし　選

貧しさを知らぬ奥樣ボンヒアン　笑哉
變裝へ化粧のしかた聞いて居る　惠美須
白粉でごまかす心いぢらしい　耳三
宿直の看護婦白粉まばらにて　庄次郎
子が出來てから白粉の香もうすく　松汀
白粉も塗らず日焦けの健かさ　波紋
爪彈のもう白粉を落してる　光哉
たしなみと云ふ看護婦のコンパクト　同
白粉を失業の妻塗り兼れて　皎月
白粉の匂ひにむせる婦人席　みのる
年頃になつて白粉こゆくぬり　承天
湯上りの白粉氣もなくいゝ女　福助
白粉のコッテリ目立つ暑さなり　瓢簞
白粉も塗る頃になり病み初め　一雄
救世軍白粉塗つた顔も居る　蝶呂久
白粉もつけずに女房よく動き　湖舟
女風呂白粉瓶の破れた音　柳月
變裝の決極塗つて貰つてる　同
白粉も知らず十八死で行き　地湧子
流連へ白粉やけの片えくぼ　しげる

身だしなみ過ぎた年増の厚化粧　同

席題　注射　ひろし　選

今はもう注射で兄を待つばかり　地湧子
カンフルへ看護婦の手もほっとする　波紋
最一ペン願ふ注射も親心　蝶呂久
カルシユーム注射にあいた病上り　柳月
看病の母注射器を怖く見る　一雄
初めての患者注射へ眼をつむり　福助
注射器へもうなれきつた腕を出し　しげる

席題　待つ身　互選

言ひ譯もあらう待つ身になつてみれ　柳月
待ち詫びて出迎え寒う風をよけ　しげる
足音へ待つ身一々耳を寄せ　波紋

川柳雜誌社
簸川支部

川柳たかせ會（島根縣）

二月十三日夜　於幸永居　伊藤緣之助報

兼題　石　雷　相　選

石屋ふと碑文の上に泪ぐみ　キョシ
石臼の音も田舍の師走にて　幸永
新しい石碑の上に鳥の糞　松隱
永劫に水底へ落ちた石一つ　同
狂亂の酒飛石にけつまづき　緣之助

席題　春の月　幸永　選

心中のむくろへ春の月が出る　雷相
春の月戀があればと思ふなり　緣之助
うつし世を三味線が鳴る春の月　松隱

席題　仁丹　互選

かたじけなく仁丹呑めど治らず　松隱
つまらなく下戸は仁丹なめてゐる　幸永
仁丹を前齒で嚙んで醉ふてゐる　雷相

子の指に仁丹の粒つまゝれず　同
家出した夜汽車仁丹などなめて　綠之助
ジヤズに今仁丹呑んで立ち上り　同

川柳雜誌社　**梅田支部句會**（大阪）

二月十四日　於鮎美居　水谷鮎美報

今度、健坊、やなぎ、香仙の三名が句作研究される事になりました、中堅に鳴玉、里十九、觀月、賀名芽の諸氏古參に冷笑・石竹、眠聲の諸氏あり、ます〳〵わがグループの盛ならんことを希ふ。

兼題　家　出　清　記　互選

一　點　句

家出した金を女に見せるなり　石竹
糞干もう家出と心きめて寢る　鮎美
家出する事を母親だけは知り　鳴玉

二　點　句

家出した其の日はすぐに夜となり　健坊
家出してさて行末を考へる　鳴玉
玄海でこつそり家出泣いてゐる　里十九
家出から互の親が折れてくる　賀名芽

三　點　句

つらあてに家出をしたがさて困り　健坊
さて家出大阪仕事ないところ　觀月
失戀を胸にたゝんで家を出る　賀名芽
おちついてからの家出は淋しがり　鮎美

四　點　句

家出してエプロンのまゝ母に逢ひ　鮎美

兼題　空　地　石　竹　選

空地で文をなびかせてゐる　香仙
がらりと晴れて空地へ傘を干し　賀名芽
（佳）劍劇もスポーツもある空地なり　里十九
（佳）空地の向ふに別莊そびへてる　賀名芽
（佳）裏の空地で遊戯しませう　觀月
（軸）ほそ長いながいまゝの空地　石竹

兼題　恩　人　鮎　美　選

恩人へ泥芋さげて國の父　里十九
恩人に戒められて愛される　香仙
恩人にすゝめられてるはじき豆　石竹
（軸）恩人はちと變窟なお人柄　鮎美

兼題　藝　者　眠　聲　選

藝者になれば藝者の氣で暮し　石竹
どや〳〵と藝者開幕前にくる　觀月
本當の年を言はずに藝者老け　賀名芽
喋るだけ喋つて藝者座をはずし　同
喜多村の藝者へ月が出てしまひ　鮎美
（軸）藝者買ひぬきさしならぬ節期が來　眠聲

席題　辨　當　互　選

うどん喰ふとこへ辨當とゞけて來　石竹
辨當へ母のしなびた手が動き　鳴玉
辨當と徽章をもらひ汽車を待ち　觀月
辨當と元氣な足で朝を出る　鮎美

川柳雜誌社　鳥取支部　**川端柳社例會**（鳥取）

二月十五日　於蓬萊館　中島鐵洲報

兼題　鳥　居　舌　長　選

町なかの鳥居は何か物たらず　源太夫
あの鳥居何か願ふた石を揚げ　青水
心願の鳥居に着いて勞れきり　耕民
鳥居から新妻と云ふ格になり　暢山
歸りにも見上げられてる大鳥居　一風
傳說の池が鳥居の奥に見え　湖山
（軸）願立ては金の鳥居を奉り　舌長

兼題　勘　定　聽　松　選

勘定日銚子が踊る繩のれん　佳水
勘定日妻も明るひ顏になり　湖山
新妻に豫算の足らぬ日が續き　鐵洲
勘定を仕舞ひ淋しふ懷手　耕民
勘定の歸り明るひ町へぬけ　青水
勘定の歸りをバーに少し醉ひ　伯山
食堂で割前をして女出る　舌長

席題　芽　互　選

筍の今にも天を突かんとす　佳水
鉢丈の土に芽生えし春を見る　耕民
河豚汁に隣の木の芽貰ふて來　青水
芝生の芽ふまれ〳〵て露に生き　暢山
炭俵まだ早ひ芽が覗かれる　舌長

川柳雜誌社　**糸屋町句會**（大阪）

一月十五日夜　於實業會館　川合舟々報

兼題　掏　摸　松　郎　選

實印を掏摸小包にして返し　源坊
夕刊へ掏摸は疊つた顏を向け　翠峯
赤い灯青い灯道頓堀ですられて來　眠聲
先頭を切つて行くのが掏摸と知れ　彩秋
肥へて居るからだに掏摸の押されてる　鮎美
掏摸とつて其天才を認められ　亂耽
神經が疲れた掏摸のひやし飴　惡源太
懷ろで數へて掏摸の苦笑ひ　毒仙
暮日の重みに掏摸は呑んで居る　新水

掏撲の身と氣付きながら馴染み行く　舟々

川柳雜誌社 **松山支部三月例會**（松山）

淺井冷々子報

三月九日ABCカフェーに會する者三十五名例會としてかゝる大盛會を極め、しかも眞面目に作句に精進した事はレコードであろう。

席題　困る　五選

うか〳〵と祝儀に辷る忌み言葉　大鷲
子の詫びに困りますよと親こぼし　春峰
試驗時親父の方がちと困り　素泉
背の子に泣かれて困るかくれんぼ　鬼笑
花嫁のごとても火が燃え付かず　素人
獨り者或る時困る事が出來　冷々子
トランクの鍵を忘れて汽車に乘り　極光
腕組が餘程困つた顏に見え　飴ん坊
困らない事には親父金があり　芳之助
吹き降りを戻つて來れば錠が下り　雨眠
困るだけ困らせて置け身の爲さ　時雨樓
困つてる事女房が氣付くなり　巨城
近道はこれで困ると下駄をぬぎ　かき松
掛取の方も困つた腰を据え　水樹
母ちやんは末子の智惠に困らされ　逢人川
何困つてるんだぼんと叩かれる　同
三味線の音に教科書困り果て　双葉
滿腹へ食べる〳〵に恐縮し　同
言譯に困る時計がちんと鳴り　句浪人
困らしてやる氣で無理な愚痴も云ふ　同
困つた事無いとふだんを意見する　流矢
幾日でせうかには醫者ちと困り　同
雨宿り困つた顏が寄つて來る　五健
困つたと困つた顏になつて見せ　同

席題　匙　五選

投げた匙生き運强く尙齒會　川の字
匙加減ほめられて嫁赤くなり　陽帆
もう無いよ匙をきり〳〵廻してゐ　逢人川
一匙で毒ともなり藥ともなる　一止
一匙の胃散でやつと飯を下げ　巨城
匙投げた仕事へ皆んなまだ殘り　飴ん坊
いゝ加減なぶつて置て匙を投げ　芳之助
氷水深いコップに匙が鳴り　花之介
藥局の匙の音聞きつゝ待つてゐる　計加
匙加減上手に出來た三杯酢　廣稔
毒藥の匙へ目鼻は遠ざかり　極光
病床へ匙とお粥を運ばれる　大鷲
ぬすみ食ひあはてゝ匙をかみくだき　鬼笑
白い手が先づ味加減匙から見　甲午子
一匙匙がちと利き過ぎた味の素　時雨樓
匙加減少し藥は色をかへ　雨眼
ほうべたへ一杯つけて匙を投げ　双葉
匙磨きながらお客の噂なり　句浪人
一匙の事で問題引き起し　玄々子
匙加減割烹欄の通りにし　壺雪
一匙匙の砂糖に亭主使はれる　水樹
惜しさうに藥局匙でへするなり　流矢
藥局の匙縱横に踊つてる　同
まゝ事の匙は疊の隙へ落ち　五健
乳鉢を皆あけました匙の昔　同

席題　朝市　五選

跳ね返る鱗の光る朝市場　冷々子
朝市にちと寢不足の顏も寄り　春波
重たさうにして朝市を出る男　計加
朝市で買いそこねてる客を呼び　甲午子
大聲と腕で買込む朝の市　榮
打鈎之朝市の魚跳ね上り　廣稔
朝市の値を競る鯛に旭が映り　巨城
朝市の列からぬ事の節のよさ　雨眼
朝市へ案内もする族の客　玄々子
一番汽車を待つ間朝市覗きに來　時雨樓
賣聲も勢のある朝の市　句浪人
ともすればなぐられさうな朝の市　かき松
怒鳴つてる内に朝市値が出來る　流矢
樣々な籠の寄つてる朝の市　素泉
朝市で見ると魚も只の樣　大鷲
朝市へふら〳〵剛る濡れタオル　水樹
朝市へ鯛を揃えに二人來る　同
朝市のどれが客やら賣手やら　素人
朝市へ來て鉢卷を締め直し　極光
朝市のたんと買ふのがだまつてる　同
祭禮の序で朝市見て歸り　芳之助
朝市は喧嘩句調で賣れて行き　同
朝市の歸り朝寢へ洒落を投げ　五健
朝市の皆な生き〳〵としたる顏　同

兼題　教科書　五選

教科書の要所〳〵へ線を引き　句浪人
あすは此所習ふ教科所嬉しくて　素人
試驗場出るが早いか本をくり　たまき
教科書へ先生氣取りの姉の顏　浦二
腕白に以合はず教科書の奇麗なり　春峰
姉のではすまぬ教科書又變り　廣稔
問題は教科書に無い事が出で　春波
教科書へ去年の木葉はぜてあり　素泉

足音に教科書をつと開けて置き　大鷲
そんな事教科書に無いと尋常科　岡桂
教科書へしおり素直にはさまれる　薩城
問題は解けず教科書伏せたまゝ　芳之助
教科書が急によごれる學期前　流矢
教科書を窮屈にする毛糸買ひ　水樹
物凄い事教科書を丸暗記　双葉
教科書に夜の十二時寒く聞き　湖山
教科書で火をおこしてる二階借　三尺野
森となる教科書へ咳よく響き　柳花坊
教科書が變つて兄の知らぬ文字　欠伸
教科書に川田芳子のプロマイド　○美
教科書の繪を讀んでゐる一年生　大樓
教科書にあつた挿繪の樣な景　町二
落第の教科書きつい汚れやう　薩城
教科書へ聲が揃つて一くぎり　欠伸
抱きしめる胸に突張る講義錄　麥村
教科書を伏せて先生眼鏡越し　蟻巧
教科書を抱いて待つてる部屋掃除　一燈
友の名の教科書がある古本屋　巨城
退塲と云ふ教科書の仕舞い樣　同
教科書の淀み針差から敎へ　雨眠
灯がうるむ眼で教科書も入れてやり　同
（秀逸　教科書の中で笑ふた女教員　十四公
（同）教科書へ兄さんが名を書いてや　捨丸
（同）教科書でペンチを掃いて寢かせ　麥村
（同）復習に好きな所だけ聲を出し　轉德利
（同）教科書へ晩酌の首右左　水樹
（同）教科書へ母を困らす事を聞き　蜜雪
（同）教科書へ姉は暗記の目をつむり　長州坊
（同）尋一は教科書抱いて寢てしまい　時雨樓
（同　教科書を親父は兄に聞けと云ふ　流矢
（同）古教科書二束三文にも賣れず　時雨樓
（同　朗讀のひよいと字に出遇い　町二
（人）國の母教科書買ふにもう乘ら　時雨樓
（地　活社會教科書に無い嘘があり　たまき
（天）父親が讀む教科書節がつき　大鷲

川柳雜誌社
堺濱寺支部

金熊寺吟行（堺）

三月三日　友淵貴山報

兼題　梅　多聞選

梅見なら二圓でいゝと母が出る　加香
昨年の梅見息子の無理な戀　同
梅のかほりもかぼそけき戀　亂耽
お饒舌な梅見の酒がまはり過ぎ　同
梅寒くふるえて酒をよんでゐる　琴人
まだ咲がぬよといふ顏で梅寒し　同
微醉の袖に觸つた梅の枝　一杉
母と來て淋しそうなる梅の花　同
梅の花左の方に海を見る　萬よし
梅の色梅の匂ひに猪口を褒め　二南
平凡な景色と梅も思つてゐ　同
陽あたりで飲んでも寒い梅見なり　二柳子
梅を見た目に寂しさとなつかしさ　黑天子
はつきりと今日は梅見の人となり　同
梅青く梅雨よりしめる戀は戀　三笑
三月三日金熊寺に梅早し　同
牛鑑に水は溜つて梅堅し　一杉
（軸）金熊寺芝居のやうな雪がふる　多聞

途中雜感　互選

空高う雲雀が鳴いて道遠し　貴山
雪がやみ一人二人と歩き出し　萬兩
梅を觀て一層寂しい中年增　三笑
丸木橋渡ると後を振り返り　朝陽
中程へ來て谷底が氣にかゝり　黑天子
見はらしでふる上つて居る梅見　琴人
金熊寺こゝも繪葉書程でなし　亂耽
金熊寺手を合さずに横へ外れ　松風
砂川も背中で見てる寒い事　同
砂川で見る煙突の聳えてゐ　一杉
砂川の色に蜜柑の木は育ち　同
女連れ窮眞の人にひやかされ　ひろし
梅の道行けば通行止の繩　同
砂川へ重たい足になつて着き　二南
金熊寺咲いてゐるのは叫ばれる　多聞
墨の酒泡になつてる金熊寺　同

第十五回

南海至誠川柳會（大阪）

二月二十三日夕、於天下茶屋集會所

竹内多聞報

兼題　舟　路郎選

心安ふお願ひします船の中　瓢山
ボート浮かべて男体山の大きさよ　五
戀中は帆かけ舟見て話してゐ　朝陽
見送つた舟豆となり點となり　黑天子
甲板へでゝ洋裝のよくうつり　貴山
バスケットよけて船室ゆずつてゐ　同
大きな船で立てよと母は云ふ　萬兩
湯に浮いた舟へ親爺も波を立て　萬年青
申又を干すに舟端借りられる　朝陽
肥船も共にならんだ橋の下　一杉
水天の境に船は一つゐる　同
何事も無かつたやうに船はつき　同

(軸)宿の二階今來た船の腹を見せ　路郎

兼題　臍くり　路郎選

臍くりの中學へ遣る程たまり　五輪
臍くりは亀の甕ものってあり　黒天子
すまん事乳母へ臍くり借りられる　朝陽
臍くりは三文判にきまってゐ　樂居
臍くりにしては濟まない金の蓄　呑陽
臍くりで小さいマントを着せてやり　一杉
臍くりを數へ終ってホットする　同
臍くりへ佛壇の灯が消えかゝり　貴山
臍くりの中でおまもり鑑がより　同
(人)臍くりのチト借しと見る氣にもなり　呑陽
(地)眞實を見せ臍くり持って行き　貴山
(天)臍くりの今日は置場を替へるなり　一杉
(軸)入院がもう臍くりを切り崩し　路郎
臍くりのさても淋しい金の高　同

席題　浜花節　互選

浜花節顎で調子をとってゐる　萬年青
一と節は雲月流にやってのけ　同
浜花節のきれめに手を叩き　呑風
浜花節丁稚叱られ通しなり　呑陽

席題　自慢　樂居選

御自慢のコロッケを出す新世帶　五輪
其自慢知る人の來てハタと止み　萬年青
さてうつとなると自慢もたじろいで　路郎
(人)國自慢江戸子少し癖が立ち　呑陽
(同)藝自慢男嫌いで通してゐ　五輪
(同)子の自慢白髮が少し目立って來　呑陽
(地)奥さんの自慢の華がサソトこは　路郎
(天)腹卷を撫でゝ自慢の腹を見せ　一杉
(軸)なさけ無い自慢士族の巡査なり　樂居

席題　辨當　朝陽選

安辨を食って信用ある男　一杉
級長は日の丸辨當さげて來る　五輪
辨當を二人前食ふ選手なり　樂居
立志傳聞けば矢つ張り腰辨當　萬両
薄給をいはず辨當のまづさ　萬年青
ほゝ笑んで食ふ辨當を覗き込み　呑陽
新妻が辨當渡す上り口　呑風
辨當がすむと子供はいにたがり　同
(人)植木屋のめしに噂の下女が來る　呑陽
(地)辨當に洋食をとる給料日　五輪
(天)辨當のぬくみ冷たい朝を出る　貴山

席題　初戀　互選

初戀に輕いなやみの日を覺え　萬年青
初戀は夢の中まで往來し　呑風
初戀のとう〳〵言はず仕舞なり　五輪
初戀の頃も菜の花咲いてゐた　一杉
初戀へ隣の子供借りて行き　朝陽
初戀の頃の日誌は歇ばかり　樂居
初戀の本を借りたり返へしたり　同
初戀の小遣錢にもう靈きる　呑陽
初戀の跡からベスが附いてくる　同
初戀のいつしか女事務をやめ　路郎
初戀の度々雨に逢ふてゐる　同
弟のやうな男に思はれて　同
初戀の感想と記者は眞面目なり　貴山
初戀の時と同んなじ九文　同
初戀のこんなところに道があり　同

月二會例會（尼崎）

一月十二日　杉原木三報

席題　歸途、課長、笛、羽子板、床ノ間

新世帶萬國地圖を床にかけ　木三
床の間のラヂオを聞いて待たされる　同
床を背に坐った父のおとろへし　吟女
笛の音にいつそ逢はずに歸らうよ　同
歸り途　朝の乞食のまだ去らず　同
床の間へ一瞥をやり勝碁也　二水
羽子板の方へ山高振り返り　同
笛を吹く頰に笑ひのこわばって　同
舞ひ上る羽子に可愛い子となって　二竹
磯の波絶え間〳〵の笛の音　同
課長としての決意ほのめかし　同
只一人課長にもてゝのけられる　同

兼題　嫂

云ひつけてもくれず嫂の立ち　吟女
嫂はあやまる程の事もなし　二竹
白粉をつけぬ嫂無口なり　木三
兒の出來る迄嫂のうらやまれ　竹城
嫂のどうやら泣いて居たらしく　同

南瓜會二月例會（八幡）

玉木南金坊報

席題　藝、生活、嘘、氣輕、足音、酔

眼立たない姿で藝者の來る　長家　微笑
生活に追れる女房の汚れ方　里人
じつと聞く足音が闇にそれ　笑節
酔ざめが都合の悪い嘘にする　嵐人
啄木を鼻で笑ってる一ぱい屋　哄笑
母親の弱さに嘘がひよと出る　省月
振かえる眼を受け切れぬ嘘を云ひ　疎水

娘丈なゝめに還入る寄炬燵　田吾作
日曜の炬燵晝飯通り過ぎ　なみ六
足音が大きく去つて出る涙　泉花坊
苦勞した嘘が笑らえる春になり　雨石
無心狀母は默つて捨ひ上げ　南金坊
勝手から亭主氣輕に頼まれる　土郎
氣輕さに長家のたつきもてゝ居る　坊文
噂だけ娘氣輕に消して逃げ　雨石

名賀壽會例會（尼崎）

二月十日、於大物村事務所　中野玄洋報

席題　醜　男　互　選

醜男の方へ年增肩を持ち　柳堂
醜男の自覺あれに一人居る　蟬古
父親にそのまゝ以たる低い鼻　虚白
醜男へ養子の口が湧いて來る　鴻堂
醜男が金の力を頼り過ぎ　陽喜亭

席題　看　板　突支坊選

看板にすゝけた窓を隱してゐ　きくを
明日變る着板を見る風呂歸り　壽郎
看板の樣に女給が立つて居る　蟬古
洋館の裏に看板錆びて行き　柳堂
看板の裏でセキセイ飼つて居る　吉郎
目印にした看板が變つて居　同
懷手ふと看板に立ち止まり　陽喜亭
ほつと出た目に看板が見かへされ　同
二の替り夜霧にしめる繪看板　東北
殺人の家看板も寫される　同
名物は古看板に味を見せ　鴻堂
この露次へ看板だけを派手に住み　壽郎
（軸）自轉車は側に見された繪看板　突支坊

席題　出　來　心　吉郎選

出來心引くに引かれぬ家を持ち　白鶴
出來心では納まらぬ未亡人　琴月
出來心前科二犯の指紋あり　月男
なづゝと思案のはてが出來心　虚白
出來心言拔けならぬ過去を持ち　同
賽錢へつひ手が延びた出來心　突支坊
出來心終に緣談まで運び　秀聲
出來心下女立つて見つ座して見つ　柳堂
（佳）出來心では濟まされぬ穴をあけ　同
（同）人の目を氣遣ふ手先ちと震へ　陽喜亭
（同）出來心バスの車掌に言ひまけろ　東北
（同）拐帶を街のラジオが呼びかける　同
（同）訊問へやたらに吃る出來心　壽郎
（人）出來心丈けですまない手のやりば　同
（地）萬引のそれから暗い影に生き　陽喜亭
（天）出來心大丸の灯が明る過ぎ　東北
（軸）出來心などですまない母の胸　吉郎

席題　映　畫　陽喜亭選

スクリンへ十年經過老けて居ず　きくを
それからが字幕になつてもの足らず　月男
映畫見に行くんだと父の先に立ち　秀聲
チャンバラになれば小供は手を叩き　吉郎
トリックと知らず喜び手を叩き　虚白
松之助呪文のうちに消へて行き　同
影寫機の音ばかり辯士しんとさせ　東北
女學生寄ると映畫の噂なり　鴻堂
百々ちゃやつばりエイと木戸を出る　突支坊
（人）小使が映畫に足らぬ出前持ち　琴月
（地）活動の風ピアノをかきならし　壽郎
（天）陽がさしてお茶子の扉はさなられる　東北

繁題　摘　草　鴻堂選

摘草をして日曜を子と遊び　秀聲
摘草を亭主ぼんやり呑むで待ち　月男
古繩を見付け摘草聲を立て　きくを
乳母車押しつゝ草を摘むで行く　香翠
摘草に妻も昔の氣で歌ひ　吉郎
摘草に近道すれば墓があり　十五夜
毒草を母子供から敎へられ　突支坊
摘草へ長閑な井の聲がする　陽喜亭
牛のなく聲に摘草黃昏れる　琴月
摘草の何處へぬいだか小供靴　綠朗
（五客）パラソルの蔭へ摘草草臥れる　同
（同）土筆こゝにもあると兒に敎へ　吉朗
（同）摘草に派手の地味のと母娘もめ　虚白
（同）摘草の品定めする野良仕事　柳堂
（同）ロケーション摘草ぐんなかけて來る　壽郎
（人）摘草の合間に忙しコンパクト　虚白
（地）看護婦と摘草をする程に癒え　鮎美
（天）母一人小川を越えず摘草で居る　吉朗
（軸）摘草に末つ子が辨當開かせる　鴻堂

丸龜わかて川柳會（丸龜）

平澤ゆすらん報

親　類　甲子選

親類え頭を下げる放蕩兒　甘々坊
親類も無くて乞食は氣樂なり　一二三
連帶の判で親類みな仆れ　素馬
親類え一寸立ち寄る旅行先　三尺野
（佳）親類は打明けられて迷惑し　無食子
（佳）親類の布團にこまる新世帶　柚蘭

(人)家柄の親類丈けを數に入れ　吉峰
(地)親類え御無沙汰わびて雨宿り　柚關
(天)沈默を破ぶり親類口をきゝ　哲夫
(軸)吉凶の時に丈けくる遠い縁　甲子

月二會例會（尼崎）

一月二十六日　杉原木三報

席題　門衛、箸、停留場

帽へ手をやれば門衛うなづいて　竹城
門衛の目に棄て猫の寒う逃げ　二竹
門衛は事あれがしの氣にもなり　木三
重役の客へ門衛急に立ち　同
箸おいて來客の聲聞いて見る　夫二
箸箱へきちんとしまふ弱い子よ　吟女
子澤山箸の長さにもめて居る　木三
箸にまで主人の威嚴見せて居る　同
停留停に近く障子のすゝけたり　二竹
停留場酒の氣もなくふところ手　同
停留場で又くれ〳〵も云ひきかし　吟女
まだ電車の見えずぬれて居る　同

兼題　兵兒帶

兵兒帶を取りちがつてる子　澤山　虚白
兵兒帶のだるんだまんま箸を取り　二竹
信ずれどその兵兒帶のだるみやう　同
この通りですと兵兒帶ゆるめて居　竹城
新しい兵兒帶むすびにくいなり　同
細い細い帶で失業やつて來る　同

阿波座句會（大阪）

松盛琴人報

相談、給料、心中、夕刊

給料の他に賞與の付く男　四五磨
給料と云ふほどの金もろて居ず　政ン坊
今月も豫算の狂ふ給料日　素郎
夕刊も賣どこで呼んだか驅けて行き　同
夕刊屋あと四五枚が賣れぬなり　政ン坊
夕刊は先づ三面を擴げて見　大地
配達のよく知つて居る戸のすき間　雪松
心中してあの世さやらで添ふ氣なり　五笑
相談は雜話のあとに改まり　越田
相談の目鼻がついて電氣灯き　高原
無一文鼎座になつて相談し　クロダ
娘にも相談するとすゝまぬ氣　村山

雅樂多莊句會（大阪）

二月十日（其二）　和田源坊報

席題　神主　松郎選

神在ます如く神主思はせる　源坊
即席の祝詞神主心得る　新水
神主を訪へば二球で聽いてゐる　同
神主を訪へば三十一文字を書き　双葉子
はな風をひいて神主休んでる　同
好い日和神主鼻毛拔いてゐる　かほる
(人)花の頃來いと神主髭を撫で　萬よし
(人)神主はイザリのやうに向き替へ　源坊
(地)神主の後ろ銀貨の音がする　かほる
(天)神主の誓ひ讀むのとたゝむもの　萬よし
(軸)神主につゞき落付き給ふなり　松郎

席題　あくび　かほる選

感心をしつゝ欠伸が續くなり　萬よし
慕合の長さ欠伸をうつされる　新水
生欠伸まだ溫もらぬ藥風呂　同
女客欠伸一つを大事がり　松郎
欠伸する位の餘裕持つてゐる　同
店番の欠伸を救ふ灯がともり　源坊
(人)終ひ風呂欠伸がすむを手を叩き　同
(地)女中部屋大きな欠伸もれてゐる　新水
(天)欠伸うつされた〈車掌切りに來る　松郎

席題　三味線　双葉子選

合の手にかまはず豆腐煮につまり　松郎
三味線と別な腕ある襟をかけ　萬よし
金比羅が彈けて嬉しい末娘　源坊
丹前を着て三味線の邪魔をする　かほる
こつそりと彈く三味線に湯がたぎり　同
(人)お師匠の陽氣ではない撥の數　萬よし
(地)世帶持つてもこの三味線はまいなを　松郎
(天)三味線に合はれてゐるむ知らず　同

月二會例會（尼崎）

二月二十三日　杉原木三報

席題　神棚、安物、旅、鉛筆

鉛筆をなめて巡査は聞いて居る　夫二
鉛筆にまで感心な子と知られ　吟女
鉛筆をなめ〳〵我が名だけは書け　同
悲しみの旅にはしやぐ子をつれて　同
安物を手柄に母はさげて來る　二水
先生の赤鉛筆は容赦せず　同
自動車で來て安物をあさつて居　木三
神棚の先代からの貯金箱　同
一人旅汽車辨まづく食ひ殘し　同

兼題　枕　許

枕許蜜柑へ伸びる手のほそり　二水

枕許靜かに更けて針の音　夫二

名賀壽會小集（尼崎）

二月廿四日　於柳堂居　中野玄洋報

席題　床の間・百貨店　互選

床の間は亂雜にして子澤山　きくを
床の間へ踊り疲れた由良之助　柳堂
床の間を物置にして獨り者　玄洋
床の間へ妻は忘れぬまゝに活け　吉朗
遲れたは床の間近く座らされ　玄洋
床の間に季節が變る暮しなり　柳堂
百貨店景氣程には賣れて居ず　秀聲
デパートに雨降ける程都會なれ　玄洋
デパートでついでの樣に買って居る　吉朗
失業の今日三越へ用があり　月男
百貨店女が行けばひまがいり　眠聲
國の客まづデパートへ連れて行き　きくを
デパートに子供を連れてくたびれ　柳堂
流行を敎へて買はす百貨店　玄洋

席題　寫眞、ホテル　互選

初戀の寫眞大事に秘めて居る　吉朗
あの子かさ寫眞へみんなよつて來る　秀聲
榮轉へどこで聞いたか寫眞屋來　眠聲
死むだ兒の寫眞のないを淋しがり　玄洋
特急へホテルの自動車待つて居り　眠聲
ホテルまで圓タク景氣よく走り　柳堂
病院の惑じでホテル寢付かれず　月男
ホテルまで送つて歸へる妞藝者　柳堂
旅の氣になれずホテルの夜は明け　玄洋
お上りは泊れぬものと見て通り　月男

雜題　雪洞へ景氣を見せる二の替り　柳堂
雪洞のどこからも一度見直され　月男
滿たされぬ顏に雪洞明るうて　虛白
雪洞に襟足白う白う塗り　きくを
雪洞に顏をそむけて女醉ひ　玄洋
（軸）雪洞の光へ櫻色に醉ひ　眠聲

第拾六回　南海至誠川柳會（大阪）

三月十一日夕　於天下茶屋集會所

雜題　泣顏　路郎選

泣顏に扱ひかれて飲みに出る　五輪
うつむいてゐるは感謝の涙なり　一杉
泣顏になれて資本家出しもせず　貴山
泣顏で笑ひ紛らす里の事　堅坊
泣顏は決心の色浮かべてゐ　黑天子

雜題　四疊半　路郎選

四疊半出て朧月眺められ　黑天子
四疊半三味と襦袢が掛けてあり　堅坊
四疊半障子ひらけば春の色　呑陽
待つてゐる事を思ふて四疊半　一杉
四疊半掛物に觸れ壁に觸れ　萬年青
禪臭い額がかかつて四疊半　樂居
四疊半三味を聞いたは宵のほど　多聞
四疊半女は羨メめ直し　同
四疊半カーテン閉めて眞晝なり　貴山
四疊半隅え靴下ほり出され　同

席題　安產　互選

土曳いて歸れば子供出來てゐる　一杉
女でもよい安かつた安かつた　萬年青
さんば間に合はぬ輕さ二度目なり　樂居
安產の守り三つも受けてゐる　呑陽
安產の聲はたしかに男の子　黑天子

安產のさんばお膳によく喋舌り　多聞
安產に盥廻つて据はる音　同
安產に亭主の方はふところ手　路郎
安產にやがて彼岸のあたゝかさ　同

席題　家出　樂居選

家を出て賴み甲斐なき反を見る　末廣
うつむいた家出盛の毛をむしり　多聞
消息は不明家出の母は老ひ　萬年青
家出して二行廣告見て笑ひ　堅坊
總領の家出世間はよく言はず　黑天子
家出する決心寥は伸びて來る　一杉
（人）母危篤嘘だろふとは思へども　末廣
（地）家出したは櫻も淋しくて　路郎
（人）家出しはしたが東京の廣すぎる　同
（天）家出戻れど父は默して泣いてる　多聞
（軸）母病新聞へ不孝詫びてゐる　樂居

席題　集金　多聞選

集金を斷ることがうまくなり　內村
集金を拾圓札で追つ拂ひ　堅坊
集金の見本と違ふとも言はれ　貴山
集金の心易さに立替へる　一杉
他所事のやうで集金斷られ　黑天子
勳八等集金人に生く　萬年青
集金は留守居に念を押し去に　樂居
面憎さ集金釣はありますよ　同
集金に子を貢ふたのは炭屋なり　路陽
集金にやれば息子は泊つて來　呑風
（人）詰襟で集金人の愚痴をきゝ　貴山
（人）集金人向ひの方は明日にする　路郎
（地）お辭儀する集金人はけつまり　萬年青
（天）集金へ子供は留守と云ひそび　多聞
（軸）齒を替へた下駄で集金女來る
肩掛は黑集金十二年　同

（以下次號）

編輯後記

▼春だ踊だと世間は騒がしいが僕にとつてはなやましい春だ。仕事の洪水は二月から三月へ三月から四月へと氾濫を續けてゐる。机上は議會のそれよりも混亂してゐる。いつ片づくことか▼三日に金熊寺吟行があつたが行樂を共にすることが出來なかつた。四日は疲れて寢込んでしまひ、五日の句會に出は出たがその夜遲く歸ると、お産騒ぎ六日の朝に三男「一歩」が生れた。そして私は獨身者のやうに、二階で埃りまみれになつてゐる。▼こんど社の組織を少しく變更した。勿論いゝ意味の改革である。（社關係の人々を參照）▼奥田雪緒（松江）和田源坊（大阪）白井梅里（豐橋）の三君が新に社友になり、多年活躍をつゞけて來た飯山、双柳兩君が一時退くことになつた。捲土重來の日を兩君のために祈つておく。▼贊助員の長崎柳秀氏が四月上旬、歐洲へ視察に行くことになつた。氏が長途の旅路に於いて特に健康を祈つてやまない。

▼客員山椒武笠三氏が二十日に亡くなられた。氏は「俳諧柳樽註釋」の著者として柳界に貢獻することの多かつた人である。謹しんで哀悼の意を表します。▼〆切後着の原稿、その他次號へ廻したものが多い。僕も別府行を書くつもりであつたが紙面がないので割愛した。（路郎生）

週刊朝日 懸賞川柳募集

題「愛の巣」　麻生路郎選

△用紙は官製ハガキ、ハガキ一枚一句に限る。應募原稿には川柳と明示すること

△住所氏名はハガキの裏面に明記のこと

△宛名は大阪中央私書函五〇番朝日新聞社「週刊朝日」懸賞文藝係

△入選作品は四月二十八日より逐次發表

△秀逸（三名）—賞金

△佳作は記念品として色紙又は短冊を贈呈

▽路郎先生のお宅では三月六日男の子を儲けられました。葭乃夫人も、赤ちやんも共に健全です。一歩と命名されました。

▽松山支部の創立後初めての例會には卅三名の出席があり、幹事はその多數に驚かされた由、益々盛會を祈つてゐます。

▽松江支部幹事は松丘町二氏の御部合で奥田雪緒氏と交替された。尤も町二氏はやはり同人として一層の奮鬪をされます。

▽本誌長年の愛讀者鷲田南耕氏の還暦記念川柳大會が四月六日神戸市仲町五丁目昭和會館で催されます。多數の御出席を願ふ

▽元同人の松本助六氏は病氣全快、近く川柳に復活されます。

▽同人淺井冷々子氏の御令閨は全快、二月廿六日退院された。

▽社友島田翠峯氏は二月一日から大阪南堀江大野病院に入院されて居る。一日も早く御全快を祈つて居る。

▽同人楊井二南氏は撃劍練習中足を負傷されたが、足をひきづりつゝも句會の世話される熱心

▽社友水田黄彩氏の母堂一月十五日永眠。哀悼に堪えません。「ホロ〳〵と骨いただけば風寒し」黄彩氏の句。

▽同じく加古川支部の宮田泰山氏は赤ちやんをなくされた、哀悼申します。

▽大橋かい知氏二月廿四日逝去これからさいふところを惜しむべし、吁々。

▽私は昨年の九月から中耳炎に罹りまだなやまされてゐます。

▽四月號は三月十七日路郎先生ひろし、琴人、亂耽、多聞と私の六人で事務所で編輯（柳子）

▼三月廿二日「きやり」の西島〇丸氏、十五日には國境川柳社の玉田苔草氏が萬よし居を訪問されたが、不在で失禮した由。

▼三月廿日夜、守口支部の創立句會が、朝田新水、石川双葉子、岩本武子三氏のお骨折りで開催され、路部圭幹はじめ同人多數出席。盛會だつた。

▼三月廿一日伊豫鐵道野球部應援團長として來阪の松山の五健氏と萬よし老甲子園に會見。聲援につとめた結果、阪神電鐵と大接戦の後、四A三で伊豫鐵の勝。老の市議戦も斯くの通りと五健氏大いに喜ぶ。

▼三月廿二日萬よし老狂奔の社民黨南區支部結黨式を日本橋倶樂部に擧ぐ、私も執行委員を仰せつかる。

▼本號の校正は桂風・舟々二君に手傳つてもらつた。その勞を謝します。（ひろし記）

移轉

岩本素人氏は松山市壹丁目關方へ▽松並光哉氏は和歌山縣西牟婁郡潮岬村上野へ各移轉

改號

清水柳陽氏は卯三、藤井假名子氏は漠々と改號

正誤

一月號の三九頁「それ〴〵の癖少使はよく判り」は假名子の句でないとのことに付取消す▽三月號の三頁の近作各陽とあるは呑陽の誤り

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の原稿紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第六卷第六號課題

四月五日締切
（各題十句以内）

▼老夫婦　森　東魚選

▼宿引　高橋かほる選

▼念佛　竹内多聞　松盛琴人　共選

第六卷第七號課題

五月五日締切
（各題十句以内）

▼白痴　前田雀郎選

▼丸刈　安井ひろし選

▼指輪　中澤濁水　水谷鮎美　共選

毎號募集

▼近作柳樽（廿句迄）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號	一部金參拾錢
新春特輯號	一部金五拾錢
八月特輯號	一部金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）	壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）	參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和四年三月廿五日印刷
昭和四年四月一日發行

第六卷第四號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替口座大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店
（大阪）大賣捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（國館）石塚
（石川縣小松）マコト屋　（京都）三宅　松山　弘文舍

川柳雑誌社關係の人々（順はゐろい）

賛助員

池澤樂居　伊藤彦造
大道弘雄　西原柳雨
岡本一平　大島濤明
片岡直方　岡田三面子
嘉納純　田中辰二
田中香涯　川村花菱
吉岡鳥平　川上三太郎
長崎柳秀　田清
藤村作　前田雀郎
國枝史郎　安川久流美
小酒井不木　小出楢重
藤本卯之助　木村半文錢
赤井清司　柴谷柴舟
末弘嚴太郎　篠原春雨

客員

蛭子省二　柳川洲馬
森東魚　楊井二南
椙元紋太　西本三笑
枚田普門　安西杏三　松丘町二
高橋かほる　龜井花童子　太田朝陽
水谷鮎美　三好革郎　北山悟郎
高見柳骨　竹内多聞　庄萬よし

社友

猪野燕柳　水田黄彩
本田柳一路　嶋田翠峯
和田源坊　中川眼隱子
友淵貴山　中野柳陽
左馬　岩崎柳路
辻兼重白鷗　岩本素人
中澤濁水　中見光路
奥田雪緒　長谷川一徹
原史風
六角桂
朝田新水主幹
青山孤舟
麻生路郎

同人

伊藤綠之助　桑原京郎
中島鐵洲　矢田冷刀
藤里好古　安井ひろし
越村加香　川合舟々
松盛琴人　麻生葭乃
淺井冷々子　酒井駒人
住田亂耿

編輯局（同人）

橋本二柳子
詫間三猿堂

大阪市南區新戎橋南詰
道頓堀支部　幹事　庄　万よし
大阪市北區北森町三十二
天滿支部　幹事　北山悟郎
大阪市外高石町羽衣
濱寺支部　幹事　太田朝陽
神戸市花隈町九六
神戸支部　幹事　楊井二南
山口縣山口町石原小路
山口支部　幹事　柳川洲馬
東京市芝濱松町一ノ三建興商會
東京支部　幹事　岩崎柳路
函館市青柳町五〇
函館支部　幹事　龜井花童子
朝鮮仁川仲町一丁目八
仁川支部　幹事　矢田冷刀
松江市堂形
松江支部　幹事　奥田雪緒

石川縣小松町猫橋詰
小松支部　幹事　本田柳一路
高知市本與力町
高知支部　幹事　中澤濁水
大阪市此花區鱧甲町二丁目七九
梅田支部　幹事　水谷鮎美
大阪市外阪急沿線刀根山療養所内
螢ヶ池支部　幹事　牧田普門
金澤市八幡町五三
金澤支部　幹事　中川眼隱子
大阪市東區糸屋町二丁目七
糸屋町支部　幹事　川合舟々
和歌山縣田邊町幽靈松下
田邊支部　幹事　辻左馬
島根縣簸川郡高松村
簸川支部　幹事　伊藤綠之助
豐橋市外牟呂二二一
豐橋支部　幹事　白井梅里

神奈川縣平塚町旭座前
平塚支部　幹事　酒井駒人
兵庫縣加古川町大川町
加古川支部　幹事　水田黄彩
京都市七條大宮東入
京都支部　幹事　桑原京郎
山口縣防府町宮市八王子山
富岡支部　幹事　兼　重白鷗
鳥取市川端町一丁目
鳥取支部　幹事　中島鐵洲
大阪市東區北濱一丁目一六竹内方
北濱支部　幹事　六角桂風
別府市驛前通り
別府支部　幹事　詫間三猿堂
堺市大町西三丁目十三
堺支部　幹事　友淵貴山
松山市外祝谷
松山支部　幹事　淺井冷々子
大阪市外守口町重庫裏
守口支部　幹事　朝田新水

渡歐に際して

四月早々に歐洲へ出かけることになりました。從つて暫く柳界を遠ざかることになります。此の際御交誼を忝くしてゐました選者ならびに柳友諸氏に拜趨の上一々御挨拶を申し上げる筈でありますが何分出立に餘日もありませんので紙上で御別れの辭を述べることを御許し下さい。何れ歸朝の上は倍舊の御風交を願ひ上げます。

昭和四年三月下旬

大阪醫科大學
長崎柳秀

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

洋裝美本　全一冊

定價　五十錢　郵稅　二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリと合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話　南　五六二番

清酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと揚げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和四年三月二十五日印刷納本　昭和四年四月一日發行

川柳とは何ぞや

——の數萬言を聽くよりも本書を繙け！實に愉快に而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入

定價 壹圓（送料拾錢）

實に氣持のいゝ本だと云はれてゐますのでよろこんでゐます。皮肉で面白いのでよく贈物になさいます。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。（葭乃）

内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び

麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博した川柳漫畫漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により收錄したるもの——。

日月は輝く

「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの——。

大衆と共に

「講談倶樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの——。

◇輕い讀物として　紅茶の後で、電車の中で……

東京市外杉並町高圓寺三二八　不朽洞　大阪市西成區千本通五の七
振替東京七六七八八番　振替大阪二五八五番

川柳雜誌（第六十三號）　定價三拾錢